特 8
133

時代眞學新報

4959

開明奇談寫眞廼復讎

五明樓主が高座の名物實事寫眞の復讐とと書房の需を蜜紙と撮よい掛りしかども人情よいいと〳〵暗き暗して光線草稿の紙室ゆゑ思取の行ざる其所へ硝子撮はど急がれてどうやら光線の海山景色人物半身ならで全身の大團圓まで二が創たる早撮よも増し發免たれば北庭筑波眞の何までも御愛顧あらば板元い此稿本を種寫の再板よ又何枚も何組も賣も出さん招牌よも掲もなせば寫眞挾と共よ左右へ置れなば編者い寫眞の珠ならねど筆の墨を磨き上げまた餘の話説を寫そと云爾

明治十六年第三月　江戸前の市隱　伊東專三記

毒婦明保乃於絹
松木彦三郎の亡霊
石秋画

旅按摩源菴
松木彦之烝
舞妓小糸

開明奇談寫眞廻仇討目錄

第壹回　美女考案して醜夫を嫁ぐ　志士奮勵して洋行と望む

第貳回　於絹頻に彦之丞と抑留を　左門大と彦三郎を說得す

第三回　乘馬軍艦を乘せ日本の港灣　萱個歸朝を漏る米國の都府

第四回　商個の話說を父女の薄命と說　醫師の仁術を病貧の兩苦と脫

第五回　逮夜の殘酒不覺も春情と誘ふ　舶來の寫眞未前を舍兄を示そ

第六回　父母を遲て兇漢遊惰に流る　本夫と恨で妬婦不義を陷る

第七回　妊娠憎む可し兩個の惡謀　天道恐る可し壹個の隙見

第八回　醫師生命と失ふ　配劑當と得て孤兒曠夫を育る　外妾世を去て

第九回　非道を罵て內弟子非道を從ふ　遊興を勸て霞小僧歸途を親ふ

第十回　小石川の闇討妙に三個を離散す　七回忌の正當暗に怪談を釀成す

第十一回　夫婦厚く行ふ慰靈の佛事　毒婦終と採る班猫の中毒

第十二回　妊夫苦み惱む神經の病癖　志士時に會ふ外國の卒業

第十三回　寫眞媒介して閨房に兄妹と會す　故人細說して裏家に往事を告ぐ

第十四回　君恩忝なし家名の再興
第十五回　病容快よし箱根の湯治
第十六回　幇間の話説より武士商個と知る
第十七回　究理の解説より名醫病者を治す
第十八回　新地の貸席より仲居金六が病死と告ぐ
第十九回　神戸の旅宿に按摩先師が横死を語る
第二十回　孝子の斷腸悲嘆の泪
片紙の撮影警人の面
寫眞を示して源庵儻敵を詳にす
言葉を紛して松木宿怨を明ます
文明の高論仁慈自ら備ふ
短銃の一發惡事自ら訴ふ
暗夜の自盡怨を解く傳次の終
枝葉の繁茂榮を見る松木の家

開明奇談寫眞廻仇討目錄終

開明奇談寫眞廻仇討

二世五明樓玉輔　口演

東都　橋塘伊東　專三　編輯

第二章　美女考案して醜夫に嫁ぐ志士奮勵して洋行を望む

婦人の姙妬なきは少く甚しきは百の拙きを覆ふとかや然れども婦人にして姙妬なきは人を過ち又其身をも過ること古へより今に至るまで枚擧に遑あらず實に謹む可き事にあらぜや然が中に近時一婦人の姙妬より本夫を害し身を殺し其兒に幾千の艱苦を掛け竟に復讐の一條に至る話說を茲に說出さん德川十二代の將軍家慶公御世知し召す天保年間の頃かとよ江戸常磐橋外本両替町に明保乃といへる仕出し料理屋あり主

個と德兵衛といひ妻とお兼といひ夫婦が中より一個の女兒と持て名をお絹と呼しが此お絹い生質容貌麗しく天保十年よい十七歳の春と迎へしよます〳〵美しくいよ〳〵艶あれば見るもの心と焦さぬい無く明保乃お絹と綽名して美女の評判高かりけるが开も之なる明保乃い仕出料理屋とい言ながら普通の客い爲ぢ當時將軍家の御三家と特囃されて威權高き一橋殿の愛顧を蒙り丸の中のお邸へい日々に多くの仕出をなし又一橋の家士よ限り來れば料理も出すゆゑ夫なる家士い交り〳〵よ來りて酒喰する中よい若殿原など此お絹が艶なる姿よ思ひを運び言寄もあり又或い中人を立て妻よせんと言込方も多かりけるがお絹い容貌の良に似合ず心曲りて其上よ嫉妬い一方ならざるゆゑ本夫とし定めぬ其人もうち若くして男の良に外よ契りし婦などあるなる可しと思ひつゝけ似附はしといふ緣談も斷り言て從はねば況てや袖を引ものありとて靡く氣色い有らざりけり茲よ其頃神田お玉が池よ醫を以て業となす松木彦三郎といへる者あり町醫ながらも親の代より一橋家へ出入となし祿五十石と頂戴いたせば不足もあらず消光をり両親早く世を去て彦三郎い三十よなれども未だ相應の緣談なければ妻ゑ娶ず獨身よして節々は後の明保乃へ立寄つ酒食の間よれ絹と見染かゝる美人を妻とし爲しなば世よ心地能き事ならんと月下氷人と立て嫁よ欲しと言入たれど德兵衛夫婦い彦三郎い女兒より年も半分餘りの上據て見識る醜男なれば如何と思へと此事のみい親の心よ任せぬゆゑ女兒よ一應言聞せしに案れ外よて承知したれば夫婦い更よ合點行ず是まで夥多の若殿原和女を望む其中よい容貌の優れし人もありしが兎や角いふて婚姻を承引ずとり醜男の松木へ好んで行んといふいと問掛ふれてお絹のいふやう其御不審いお道理なれども男の心い秋の空と世よいふ通り變り易き中よも容貌の能き男い他所の女と語ひて妻に難義を掛る者の世よいと多くいゆゑ日外よりして言入る婚儀も先方が美男子ほど妾が嫌ひて斷りしが夫よ引かへ松木樣い御覺の如くの醜男よて殊よ年ざへ三十よあれば夫婦と成て年月ふるとも仇し女よ迷ひも致さト然すれば後々此身をば見捨らゝるも有るまじければ憩ひ若き能き男を持より松木へ行きし方が結句氣安く思ひますれば夫で承知と致せしと演しは嫉妬深きゆゑと知ぬ夫婦い一通の理よ迫られて尤もと承諾すぐに日柄を撰び結納なども取交し目出度婚儀を濟せしに松木い戀がるゝ美婦人を妻にせしとて打喜びれ絹い元より両親へも殘る方なく行屆かせれば夫婦中さへ睦しきよ是をば見聞一橋の家士い元より近邊

よても不釣合なる夫婦なりと笑ふ者さへ多うりけり斯てお絹ハ程もなく彦三郎れ胤を胎し翌天保十一年の春月満て生落せしハ珠れ如きの男子なれば彦三郎ハいふも更なり徳兵衛夫婦の喜びハ一方ならず其名さへ彦之丞と附つゝも愛育するうちお絹はまた血の氣もあらず肥立しかば夫婦は彦之丞の成人を只管樂みゐたるうち喜びあれバ哀みある世の習慣とて里方なる徳兵衛夫婦ハ三年が中ゟ打續いて死去しゟ跡を繼可き兒のなけれバ親族中の何某を直して家名を繼せしが實ゟ月日ゟハ闕守なく今日と暮明日と明け安政二年の春とゞ成しゟ此時彦之丞ハ十七歳醫者の道さへ略心得年ハ行ねど父親の代脈なども勤るゆゑ兩個の親も末頼母しき者とゞ思ひゐたりける偖も其年徳川十三代の將軍家定公ハ當時旗本中の英才子と聞え高き勝麟太郎安房を以て安房守ゟ昇進させ米國へ渡航させらるゝゟ附き同じ旗本中の二男三男にて是が供に立可きもの三百人を募らるゝ此一件の總裁と一橋家へ仰られしが何故斯る使節とゞ米國へ遣さるゝといふ次第を茲ゟ尋るゟ此年より三年まへ嘉永六年三月の首米國の使節ペルリなるもの軍艦ゟ乘込日本ゟ渡航し浦賀の沖ゟ艦と寄せ先の將軍家ゟ國書と呈て彼我貿易を開かんと望たりしが容易ならぬ事にてあれバ卒爾ゟハ回答さへ成

成り難しと一度使節ハ歸國なさしめ天下の有司と計りしそゝいよ〳〵貿易を開く事と決せしより勝麟太郎を安房守ゟ昇進させ回答書をバ是ゟ齎し米國へ遣事ゟハなりけり然バ一橋家ゟ於てハ隨從の壯者三百人を旗本八萬騎の中より募らるれど未だ見も知ぬ異國へ向け波濤萬里を隔て行バ生て再度日本へ歸り來らるゝ事なるや否も思ひ定めかね應ずる者とて有らざれバ此ゟハはと〳〵困ぜしより旗本中の次男三男を一度ゟ集め慰と引せ當りし者を三百人隨從爲せる事に決し是非も言せず闔を引せ當りし者の姓名を帳簿に記して人數を纒め來る三月二十日横濱港と出帆なせバ各自用意と調へて勝房州に從へよといと嚴重ゟ徇たるより畏まりぬとお受ハあせども心細さハ言ん方なく常ゟハ武藝を表面ゟ顯し御國のお爲天下の爲ゟハ馬前の討死覺悟の前と言しも見知ぬ國へ行と言バ心に憶れの來て悲び者より父母や兄や妹ハ歸ぬ旅へ行もなず可く嘆くよりいとゞ心の落入て春とハ言ど我一個秋かと各自言ふ中ゟ彦之丞ハ此度れ事を聞知り何やらん心ゟ思ふ由やありけん一個思案の胸と定め其年三月十九日の夜巳が部屋をバ立出て兩親の居坐敷ゟ赴き今度勝安房樣ゟハ將軍家の命と奉じ米國へ行るゝゟ附き三百人の壯士と募り隨從せらるゝ由ゟ聞しが其總裁とそ一橋

辭別ては惜
みて生母が
洋行
ては拒む
お絹
彦三郎
彦之丞

源庵

家とゝ願ふてもあさ僥倖なれバ何卒吾僕も勝樣のお供をなして彼國へ赴きたけれバ此儀を
バ御許し下されうしと突然言出す忰の言葉ゑ夫婦ゝ呆れてゐたりけり

第二回　於絹頻ゑ彦之丞を抑留す左門大ゑ彦三郎と説得す

一子の言辭に驚きたる父彦三郎は膝を進め彼亞米利加といふ國は夢も通はぬ唐土といひし
支那よりも遠く人も違ふか姿さへ袂も有らぬ筒袖ゑ股引樣の物を穿ち髭茫々と生し居て牛
の豕のと汚れ多き特のみ喰る其國へ御用あがらも行を厭バ三百人の人々初め父母兄弟も泣
き悲むゝ武士すら已ゐ斯なるゑ足下ハ醫師の一子ゑして今度の事ゑ關係なき身を持あがら
何故ゑ波濤隔て生死も計り難なき外國へ行んと言も出せしぞとうち問ふ本夫の言辭ゑ附き
毋のお絹ハ猶更ゑ一子の心不審さよと問れて彦之亟ハ形を改めお兩個樣が御不審ハ御道理
ある次第ゑてたゞ洋行が爲たいと耳でハお解り有らぬも無理ならねバ仔細とお話しやす可
し抑も我家ハ先祖より醫者とバ以て業となせども元之れ漢家の主劑ゑ主て漢家ハ伏羲神農
の教へを守れど療治の爲方迂遠ありとて近きころ世ゑ行ハるゝ蘭方の療治を世間にもては
やさるゝ爲方を見れバ迅速なり此蘭方ハ阿蘭陀人我長崎へ渡航なし御國の醫者ゑ教へしよ

り次第ゑ廣まる異國の藥法海外諸國ハ數年前さへ醫の道已ゑ斯の如く開けをりつゝ今ハま
た驚く程の發明ありと人も語りつ我も聞バ父御も定めし御存知なる可し故ゑ此度勝樣のお
供をなして彼國へ渡り病氣と號して米國の病院へ入り院長ゑ會て吾僕が素志を迷べ歸朝の
お供ゑハざと漏れ五年十年修行となし日本國ゑはまだ有らざる不思議ゝ發明稀代の治術人
身究理舍密の學問習ひ覺にて立歸り救ひ難なき患者を救ひ松木の家名の世に輝かし名を萬
天ゑ上んといふ望ゑ有る身にしにバ此洋行ハ盲龜の浮木ゑ風と得たりし幸ひゑて只管望む
ところなれバ單ゑお許し不されかし又見馴ぬバ彼國人の衣食の異風ゑ驚きて鬼畜の樣ゑ中
せども同じ地球の人類ゑて便宜の爲ゑ筒袖の衣類を着し獸肉ハ滋養の爲ゑ食するもの开と
汚るとハ舊弊のいと甚しき事なりと肝膽と吐き意中を示し眞情面部ゑ顯して得失詳細ゑ述
たるゑを想の外なる一子が奮發實ゑいとじくも覺悟せしと父は感嘆したりしが母は毫も聽
入ゝ如何なる不思儀の治療法が有か知ねど波路を越る風土食物變りたる國ゑ五年も十年も
住居て若も病ゑ罹り死あバ是まで育たる甲斐さへあらで樫の實の一粒種と先立て父公や母
が此後の介抱ハ夫も誰がそるよし又無事にて過すとも十年たゝバ父公ハ六十母は四十ゑ近

くならんと其兩親が何々時病氣その他が有しとて看護も出來ねば親不孝和郎が常と讀本と
も父母在すときは遠く遊ばずと記してあるを識ながら是非とといふは聞譯なしたとへ父公
は承知するとも父公計りの子とあらぬば和郎と洋行させるのは母は承知がなり難しと婦人
儒る理屈さへ聞ば實とも思愛と引れて父は言甲斐なく其と一子を抑留より彦之丞は情な
しと思ふよりして言辭を盡し猶種々と説しかど父母はつや〳〵承引き果は怒りの聲荒立不
孝者めと罵詈るゝまで力あく〳〵座と立て已が臥床へ入たりしが然よても斯までお思ひ立
たる我志願つゞまる所ろは家のため又國れため世の人〻爲とし渡る海原の底より深き願ひ
をば父母が止しと止りなば又何と期し思ひを果さん一度不孝の罪を得るとも大功は細瑾と
顧見ずといふ古語も有と明日は船出と究りたは今宵と空あく過さんやと兎さま角さま想ひ
つゞけ心と急度思案と定め枕とひゞく石町の鐘算ふれば丑三つゆゑ窃と起出衣服を改め手
箱の中より金取出し懐中なして部屋を立出次れ間よりして兩親が寂息を窃と窺へば前後も
知ざる光景なると一個點頭裏手なる雨戸と手を掛け音せぬやう開いて庭へ立出て傾く月を
便となし一散走りと豫て知る丸の内なる一橋家の邸と至りて門打さゝくと今日は殘らず邸

へ呼上勢揃ひさせ横濱まで至りて午後七つを合圖と出帆させんとの事なれば一橋家は前後
より混雜なして寐る間もあき程とておれば門さへも容易通り彦之丞は同家の留守居森川左
間が許へ至りて面會なし我れもふ事は元より父母の止し次第と細數語り然ども志願止難け
れば窃と家内と脱出て此お邸まで參りしなれば何卒お供と仰せ附られ洋行願ひ奉つると思
ひ入てぞ述たりける凡庸ならぬ彦之丞が言辭と左門は感じ入り夫を止むる親心は恩愛然も
こそ有可けれど遥〻彼地へ押渡り醫術修行をなさんとは武士も及ばぬ足下の魂ひ左門はは
と〳〵感心したれば望みれまとまと隨行さす可しまた父彦三郎は此方へ呼寄せ故障なきや
う説得いたさん最早七つも打たればと文書を認め下部と持せお玉が池へとやりたるあと六
つとして豫て觸しかば勝安房守は七つと登城し將軍家とお目見得なし直と一橋家へ來りし
かば三百人の隨行人も追々こゝと集り來つ父母兄弟は見送りの爲とて從ひ來りしゆゑさし
もと廣きお邸うちも露を立可き寸地もなく最ぞ混雜なしたりけり然ばまた彦三郎夫婦の者
は一子をば止たりしと彦之丞も思ひ止る容子の見ゑしは先是なれば安心と寢酒と傾け寢た
る翌朝曉近きころ内弟子の源庵といふ若者が小便と行んと立出て見れは雨戸の末が一枚明

てゐるよぞ盗賊が這入し物かと家の中探せど變りし事ゝなくたゞ彦之丞が我部屋よ在ねよ再度驚きて主個夫婦と起しつゝ此旨斯と告たるよ夫婦ゝ疾くも夫と悟り偖ゝ思ひのやる方なさよ家を忍びて行たるかと暫し呆れてゐたるとり門口けわしく打たゝく者の有よぞ誰ぞと問ば一橋家の使なりといふよ門の戸押開けば使が出す文箱とば源庵取次差出すよ主個ゝ封をとく〳〵も讀下したる文面ゝ留守居左門が自筆よて急病人が出來しゆゑ即刻來よとの事なれば一子の行衛を探す間もなく彦三郎ゝ衣裝を改め五郎助といふ下男よ藥箱とば脊負せてお待遠との一言も如才内儀が手に渡す刀を帶て五郎助が直す雪踏を足に掛け使と共よ玄關より出てぞ急ぐ道々も一子の事と思ひつゞけ一橋家へ至りしよ森川左門ゝ彦三郎を親しく已れが居間へ招き急病人とて呼寄しゝ至急を要さん譯よして實ゝ子息が如此と夜中よ來られて語られしよ已れゝ感心なしたれば含みを以て隨行させれば其旨足下よ言んため斯の次第よ及びしが世よも人よも俊ものと兒よ持れしゝ浦山しければ必ず異論と言給はで洋行させて學術竣へ名と揚げ家名を輝かす目出度春よ老樂の左り團扇と遣のと今より樂と待れよと頻りよ譽て說たりけり

第三回

衆庶軍艦よ乘ぜ日本の港灣壹人歸朝よ漏る米國の都府

思ひ掛ざる森川が言辭よ偖ゝ一子めゝ此方へ來りて賴しかと彦三郎ゝ驚きしが元より已れゝ感じゐるを妻よ言れて心感ひ止し事に有なれば斯まで勇健な心ばゑよ左門が說諭よ恥らひて暫時首も上ざりしがやう〳〵よして彼方よ向ひ親恥かしき一子の志願を止ましたい思愛よ引れし吾儕の誤りなりしが思ひ込つゝ貴下まで願ひしのみか最厚きお說諭よより迷ひの雲霧今ゝ殘らず晴ましたれば此末ともよ一子の事ゝよしなよ願ひ奉ると言ば左門も打喜び彦之丞をば呼出し委細を語り聞するよぞ是の喜びゝひと方なら忠父が前よぞ手を支へ如何至急よ迫ればとてお両親樣の仰と背き家と脫出洋行を願ひし不孝はお叱りなくお達下さる有難き最早母公よお暇乞と致す時間も御坐られば貴下よりしてお腹立のなきやう單よ願ひまする又吾儕の滯留修行は十ケ年といふ見込よて末遙なる事にてあればお身の上をば御自愛なされ御機嫌よろしくお消光あつて歸朝をお待下されと立派よいへぞ住馴し日本を離れ兩親よ別るゝなれば我知ず翻す泪は一子より父ゝ是との親と兒が一世の別れよ知ねぞも虫が知すか泪のみはふり落つゝ無事よ消光をり〳〵便りをして呉と言も口籠る兩人の心を

察して森川左門ももらひ泣どば爲たりしがはやくも人數が揃ひしと知せよイザと仕度をさせ足下が事い出立のあとよて殿よよき樣よ執成致せバ安心せよと彦之亟よ宣告し勝房州に從隨せ三百人の者もろとも横濱へとて出しやりしい明六つ近き頃ありけり然バ隨行人の親戚等い飽ね決別を悲みて横濱までも行んとてみあ雜踏〳〵と見送りゆくよ彦三郎も此事を妻のお絹よ告けたれど別れよ忍びず是もまた八里が道を遠しとせず横濱さして送りゆく送るも凋れある容子を察して房州君い着港そると其まゝに三百人と六手よ分ち料理屋へ入れ酒飯を賜ふよ各自酒も咽喉へ通らず飯い食ねど胸張て泪催ふす計りなりしが早くも七つとなる鐘い海よ響て出船と促さるゝよ勝君はじめ端船よ乘て追々と遙の沖よ碇泊なす蒸氣船とか乘込よゞ是よて人數揃ひ去と知バ忽地砲一發黑くも殘る石炭の煙りとあどお涙を分け走る大船見送る人々見返る人も本牧の沖と離れて野毛山も漸次〳〵に遠ざかる八重の汐路の涙のうへ間もなく見えゞ成しらば一同いたゞ茫然たる中にも松木彦三郎い力も脱て歩行可き氣力もあらねば付與を雇ひお玉が池ある我住居へやう〳〵歸り來りしい夜も初夜すぐる頃なりけり斯とい知ねど女房のお絹い本夫の歸りの遲き一子の行衛ゞ案じわび一個胸

をバ痛るとりから本夫い歸り來りつゝ今日の始末を云々と語りて和女よ一應い話しもせんとい思ひしかど一子の志氣と左門どのが高論よ羞て會せもせずやりしい一子よ感心し和女に未練と起させまじとの事にて有と一伍一什を演ゞよれ絹は且呆れ且は本夫と一子とバ難面者ゞと恨たれど彦三郎が理を說て諭すよ果い合點ゆき其まゝよして泣止けり去程に彦之丞が乘込たる勝房州が一隊の艦い海上無事よ其年の六月中旬よ米國なる柔港へ着しかば茲より一同上陸しまず紐育よ旅宿を取り條約書をバ差出すよ彦之丞い着と間もおく病氣と號して其都下なる大病院へ入院なし箭を窺ひ通辭を以て我志願とば院長よ聞ゑ知せば院長い然耐忍と舊發力を有そる人が我國へ渡航なせしゞ米國の幸ひなれゞ諸民百家の醫事の秘訣と皆傳あし日本よ是を弘めさすれバ此國の榮一方なら玄と松木を留て醫の道と傳ふる中に日ならずして條約整ひ勝君よい隼麻と卒ゐて歸朝なせバ松木も其よと言れしがと豫て心得ゐたるとなれバ病院長が彦之丞が病氣い未だ全快せざるを艦よ箭じて萬里を渡らバ生命とても覺束なけれバ快愈そるまで此方よお殘しあるが然る可しとヤし出しよ勝君も實よもと思ひ松木のみい後の便船次第よせんと殘して歸朝せられけり斯て彦之丞い勉强以前よ十

倍せしかバ内外の治療大畧ハ其奥儀をバ究しとり彼國有名なる究理家エレーマン氏に邂逅せしヨエレーマン氏ハ彦之丞が奮發心と大ヨ好しもと醫術と究理學とハ密接の關係ありて醫と業とするもの究理と知ぎバ其術長るも甲斐なけれバ我ヨ從へ教やらんと言るゝ言葉ハ有難しと夫よりエレーマン氏ヨ從ひて究理舍密の二術と學ぶヨ同氏ハ是が楷梯ヨまづ寫眞の術と教へ彦之丞の姿をバ寫し撮てゞ與しヨ松木ハ右の事柄を委敷認め消息ヨ添て己れが寫眞一葉と船路の便りヨ日本なる父母の許へゞ送りけり去程ヨ彦三郎夫婦のものハ朝な夕なヨ一子の事のみ思ひつゞけて無事で居ヨ壯健で暮せと交み代りに祈ぬ日とても有らざるうち平常爰へ出入なす三田一丁目ヨ住居する金六といふ小問物屋も近しく來りて夫婦のものと慰めをりしが其年の四月の上旬離なる卯の花吹日入來り折ふし客も有らざるゆゑ主個の居間ヨ立入て今日ハチト先生ヨお願ひヤしたい事が有つてわざ〳〵參りましたるが何卒お聞濟下さいましと言ヨ松木ハ片頬ヨ笑み金六どのとした事が何事かハ知ねども不斷出入をなさる和主わしが力ヨ及ぶ事なら何でも聞て上ませうといふ側よりお絹もまた遠慮あさらぬ被仰れと問れて金六手と支へ有難い其言葉夫ヨ附てハ二年越お出入致せと未だ染々ヤし上ざる我身の上より共にお話し致します一通りをバお聞下さいもと吾儕ハ淺草鶯訪町で狹少小問物屋の一子なりしが兩親のない後ハ身を放蕩ヨ持崩し所々とバ飛で歩行うち一つゞつ取る年ヨ恥ぢ江戸へ歸つて女房と持ち三田ヨ住居て覺えた家業糶小問物と致してをりお屋敷方や町家でも能花主も多く出來喰ヨハ困らぎ成ましたが何を言ヨも細本錢ヨ拂物と引取たり問屋へ勘定する六りヨは金ヨ困るも度々ゆへ岡山侯の藩中ヨて御蹟貧蒙る旦那先厚倉善之進樣へ參りてハお話し致し時借ヨ何十兩でもお借ヤ玄繰廻玄てハれ返玄ヤすれ絵返しも不義理な事と致しませねば何とても貸て下され用が足り差支あくして居りましたと話の中に女房が入て次だる茶の出花憚りさまと會釋して金六ハ手ヨ取たりけり

第四回　商賣の話說ヨ父女の薄命と說醫師ハ仁術ヨ病貧の兩苦を脫

茶と飲終つて金六ハ茶椀を下ヨ置つゝも彼方ヨ向ひ再度いふやう左樣致してとるうちヨ然も一時年春のはじめ女房ハ病氣と成たとり問屋の勘定その外の金ヨ因つて厚倉樣より金三十兩拜借し一時夫ヨて操廻せしが妻ハだん〳〵病ひの重り看病するヨも一人身躰商賣ヨとても出ゞれぬゆゑ内の入用何や彼やと費も多く掛りしすゑ丹精甲斐もあらずして妻ハはか

なく成しかバ其取置よも金が掛り三十兩と返すハ偖おき世帶道具も目欲い物ハ賣て入費よそる樣なれバ少しの本錢を他所ゝら借再度荷を背負出るやうよ成ても急よハ穴が理らず厚倉樣へも御不沙汰ーて夫より月日と送つてゐれど彼方さまより御催促のお文書一本今日まで來ぬのハ定めし御立腹か又ハ此方の容子をバ御存知なきゆゑ欠落でもしたかと思つてれ出でありう先兎も角もすし驛とと御門前まで二三度ハ行し物から手ぶらでは敷居が高くすご〳〵と歸る遠慮が無沙汰よあり半年一年經て見れバいよ〳〵金を持ねバ行ぬと思つて精は出しますれど三十兩といふ大金ハ中々一時よ纏まゝず濟ぬ事とは知ながら其内どうかと片時も心よ忘れぬ計りよて仇よ過すも三年越し今日創すも両國の廣少路をば通り掛ると向ふから來た一個の娘髪もおどろよ裝形さへ未だ寒いのよ汚れた浴衣と二枚かさねて其上へ半天羽織の襤褸〳〵したのを着てゐて袂よ燒芋か何かを入てゐる容子は女乞食と思ふほどひどひ姿で有なれど如何やゝ見知た女の兒とよく〳〵見れバ是ハ如何御恩に成た厚倉樣のお獨り娘お蔦樣で有りしよ思ひ掛ざれば究りの惡さも打忘れ側へさしより貴娘さまが此お姿いとお聞ゆせばお孃さまも吾儕にお會なされて面目なげよオヽ金六か聞てくれ一昨年の春お父さまハ家中の妬みお讒言されお暇よ成り俄浪人屋敷を出て此両國の米澤町へ引移り親子三個暮す間もなく母御がどつと床よお着なされお死沒あされし後父御も御病氣よて二年おまり起もあさらず只さへ居喰の浪人が累々の此始末よ今ハ其日の煙りも立兼父女二個が泣く音さへ血を吐く思ひれ杜鵑ゝる影もなき此姿と和郎よ會も面目ないとの話しよ驚きお孃さまと御同道して行て見ますと米澤町の裏借屋棟割長屋の九尺二間いぶせき住居で旦那樣ハ煎餅蒲團よ柏餅病ほゝけたるお姿と見より胸のみ塞がりて泪なからよれ目よ掛れば厚倉樣ハやうやうと枕をもたげて金六か和郎は久ゝく見ねなかつたが無事でゐたかとのお言辭よ此身の上を委敷申ゝ返濟金れ辯解を致せど耳よも掛給ハで其樣お事は如何でも能が和郎ハいかゞしたりしと思ひとりしが其方よも然いふ不幸が有たかと返つて厚きお辭と蒙る此方の面目なき委細ハ只今お孃樣より承まハりしが奥樣にも長逝といひ貴下の御病氣さぞお心細ふ御坐りませう而して御醫者ハどちら樣のと聞ば旦那は吐息つき初めハ醫者にも掛りしが段々貧苦よ迫られて今ハ藥の代さへ出來ねバ是非なく醫者よも掛らずして死と待ひみの不甲斐あさ娘お喇ゝを聞しよなゝバ隱すも益なき事なれバ申すが余程前よりして米

といふもの喰しことおく雑具を賣てハ燒芋と買て父女が其日〳〵命を繋ぎをるのみと語るも聞も泪の種有爲轉變ハ世の中の慣習の言ど情ない豊よ暮したお身の上が此光景ハ何事ぞお借アした我金の三十兩が有つたあら此御難儀ハさせまいものと思へバ最ど痛しく幸ひ今日ハ商賣の有た賣上二兩とバ其所へ出してお嬢さまよお米ハ元より旦那様れお口よ合ものの何ありとお上なされて下さいと出せゑよ旦那もお嬢さまも恩と受たる者も多いよ斯落魄てハ誰とても尋る人も非る中恩を忘れぬ和郎の信義と僅バかりな其金を押頂きしれ心根をお察しアせバアすほどまさる嘆きよ其家を出で此家へ參りましたのも三十兩れ其金が今吾儕よ出來ますれバ直に返して醫者よも掛け御恩報じも致しますれど何をいふにも出來ぬハ金然りとて見過ず譯よハ行ねバ責てハ旦那の病苦だけも助て上とう御坐りますゆゑ中し兼たる事ながト此金六が煩つて寐てゐる事と思しめ玄恩人厚倉善之進様の療治をなされて下さりませと思ひ入たる金六が衰れな咄しの長物語りつく〳〵聞て彦三郎目とすり赤め點頭て世よ薄命な父女のもの元これ醫者ハ仁術ゆゑ親疎と問ず病ある人を救ふが本分よて病家の貧富ハ構ハぬもの況てや和主の思人が今聞く談話の衰れな体裁いかでか是を救はざらんや

後とも言ど今すぐよ同道なして診察せんといへバお絹も賞ひ泣の泪を拭ひて旦那さまが彼程までお仰せゆゑ藥禮などの心配ハ毫もしないで充分よお療治お受なさるがよいと夫婦ひとしく頼母しき言辭よ金六有難く何分よろしく願ひまする御案内よハ吾僕がと藥箱とバ五郎助よ背負せつゝも立出る松木の先よ立つゝも案内をして米澤町の裏屋よ至り如此と話して松木を招じけり登時彦三郎ハ首を廻らし四邊と見れバ聞しに違はず月も漏可き賤が伏屋よ病る主個ハ六十年のうへ五つか六つか越しあらん娘といへるハ十六七よて身よハ襤褸をまとひながら天然の美は磨ざる珠よ光りの有ごとく容貌もよきよ憐れれ増し彦三郎ハ善之進の脈をとつくり窺へバ是れ喘息の重りしものよて二月餘りも服藥なせバ全快なすこと速かなゝんと見立ハ慥よ認しかバ其旨父女金六よも聞せて藥と與しよ三個の喜び一方ならねど彦三郎ハ病苦より貧苦を先へ救はずバ世帶の苦勞よ氣を焦ち反つて病よ障るべしと思へバ丁度懐中よ持合せたる金五兩を紙よ包て病氣見舞と號して父女へ送りたるハ夫と言ねど貧苦まで助る眞の仁術ハ實よ醫ハ意ある當意の惠金おもひ掛ねバ三個ハ有難泪よ暮よけり斯て彦三郎ハ其日ハ其儘立歸りしが夫より後ハ二日目三日目親しく見廻り藥を與へ其度毎

よ金さへも惜も少の事よあらねバ父女ハ病苦のみならず貧苦も次第よ忘るゝ如く初め二月と言しに違はず其年七月上旬よハ善之進がさしもの病痾も怠たり果しハ全く松木が一方ならぬ恩惠よ依る事なりとて父女ハ元より金六さへも彦三郎を神の如くよ敬ひけり

第五回

逃夜の殘酒不覺に春情と誘ふ船來の寫眞未前よ舍兄と識す

人世の果敢ハ朝露一滴たれか百年の齡を持たん去程よ厚倉善之進ハ松木彦三郎の情よ依り病苦もろとも貧苦も愈え親子が衣食も人並々よ成つゝ父ハ昔本と寫して僅の錢を取り活計を立る樣よ成しも偏に松木の蔭なりと父女を首め金六も世よ有難く思ひけるが久しく病の床よ臥し立居もなさで居たるゆゑか善之進ハ其夏より脚氣の病を引出せしが娘よ言バ累々の病苦よ又も案じやせんと耐へてゐるうち八月十日の夜中よ突然苦しみ出すにお蔦ハ途方よ暮ながら介抱する間もあらかなしや夜曉よ息ハ絶しよゞ死骸よ取附前後不覺のなく音の漏て隣りの家より尋來れバ此始末よ是さへ驚き醫者よ藥と騒ぎゐるとハ夢知ねど虫が知すか金六ハ今日本所まで朝早く行ねバならぬ用事あり久しくお訪問申さぬゆゑ厚倉樣と伺はんと未明よ三田と立前て米澤町を訪問れバ家ハ長家の者の來りて此混雜ようち驚き是ハ誰

より松木樣にお見せなさるが能しからうと人と走らせ彦三郎を迎へて斯と告たるよ彦三郎も驚きながら篤と診察したりしよ這ハ個れ脚氣の衝心せし物にて有れバ發病前足の痛の其中よ療治とせざれバ今更よ詮方なしとの見立ゆゑお蔦ハ頼の綱も切れ不覺泪よ暮たると金六種々よ慰めて葬禮のこと何呉と仕度よ掛れバ彦三郎先立ものハ金なりとて又此入費を惠たる累々の眞實よお蔦ハ如何ある因緣あつて此まで深き御恩とバ受る事やと有難泪その蔭よ依り葬禮も人並々よ濟せしのち今日ハ亡父が初七日の逮夜なりとて金六はじめ世話に成たる長家の者を集へてお蔦ハ掴み料理こゝろ計りな馳走をなし皆立歸りしその跡へ來るハ松木彦三郎向ふ兩國元町の病家へ行んと我家と日の暮るころ立出しが忘れ物とバ爲たるを廣小路まで來て思ひ出し供よ立たる五郎助を我ハこゝなる厚倉どのゝ家とバ暫し借て待バ汝ハ此所へ藥箱と攜て我家へ立歸り忘れ物をバ持參せよ又今朝のほどお成道の石井どのから藥取の來りしかども我もわず源庵さへも居ぬとて其まゝ歸せ去由なるが抑は調合簿よ記去あれば汝歸らば源庵よ調合させて置て來よと吩付るうちはや門口へ來りたるにゞ防間れバお蔦ハ立出お珍しゝと會釋を爲て日外よりの禮など言バ彦三郎忘れ物せし事をのべ其を

持ねゞ元町の病家先へは行兼れば暫しの間と頼み聞え五郎助を急し立て我家へこそゝ歸しけりあとは男女のさし向ひお蔦ゝ幸ひ製へし精進ものゝ料理を並べ酒さへ出して初七日の逮夜のよしを述つゝも待遇主個よ客ゝまた成る口ゆゑゟ實ゟ酒ゝ之れ腑た色の娘妓とて五十年よ近き彦三郎彼の小間物屋の頼よ依て是まで心配なしたるゝ實意のみよて仇し心ゝ元より毫もあらざりしが今はろ酔の春情つく〳〵見れば お蔦ゝ十七天資の容顔美麗きよ腕まづ先へ薄さてツィ口へ出る戯言よれ蔦も無理よれ合して顔もほのめく櫻色父が死後よで大恩よ成しお方れ此信切斯いふ人よ身と任さゞ行末頼母しゝゟんよと之も色づく年頃の娘の情のやる瀬なく互ひよ思ひ思いれてゝ何方が先か後よての嘆となるも白露の翻れかゝりて轉び寐よ果敢契りと結びけり斯る所へ路次口の溝板高く人足のするに二個は慌き起き亂れし姿なゞ取繕ひ素知ぬ顔してゐる所へ立歸りたる五郎助が忘れ物さへ持來れゞ彦三郎は受取て禮を述つゝ何氣なく五郎助引連立出て向ふへ渡り元町の病家を濟せ我家へ歸り去後もとり〳〵訪問世話の事と賑ひて外妄としも爲りしかがお蔦は元より恩ある人心と迫て仕ふるゆゑ二人が中はいよ〳〵深かり然ども松木の女房お絹ゝ生質ての嫉妬よて本夫が常よ下女はしたへ優き言葉を掛てすら設やと疑ふほどなれゞ若き娘の有る家へ度々行と知せなゞ返つて事が面倒あらんと初よりして金六よたゝ頼れし義理一遍と外よゝ何も言知せずまた金六にも五郎助よも堅く口留なしたれゞ金を惠しことは更なり善之進が死たる事もお絹は毫も知ざれゞ況てやお蔦と本夫の中知可き道理ゝあらざるうへ彦三郎もまたお蔦をゞ外妾となして通ふ程に成りてゝ下男五郎助よも知せぬ樣に忍び行きたゞ金六よのみ仔細とゞ明して彼方の見廻りを頼めるうち五郎助ゝ國なる母が病氣のよし報知越しよ暇をもらひ信濃國へと立歸りあとへ置たる傳次といふ下男ゝ年も若しといひ氣心さへも知ざれゞいよ〳〵是よゝ言ざりけり兎角するうち米國より寫眞と添たる消息の届き彦之丞の上云々と記し附てぞ有たるよ夫婦ゝ未だ日本よて見し事もなき寫眞の術生るが如き一子の姿よ世よゝ稀代お術藝もある事ぞとて感心あし松木ゝ夫より其寫眞と始終懷中なしてとりしがお蔦ゝ何か彦三郎の情の胤を身よ胎し期と告るよ喜びて今のお絹と夫婦よ成十八年余よ成たれゞ彦之丞といふ一子のゝにて夫すら今ゝ遙なる涙路を隔し異國よ在り心細さいやる方なけれど個ゝ人力の及ばぬ所ろと思ひをりしが和女の腹へ出來たゝ何より嬉しきわけ生れし其子ゝ此

寫眞の弟か妹か早く見たしと夾雜ク〳〵ぐり彦之丞の寫眞と出して見せるるお蔦も初て見る一品世ゑ珍しき物なりと珍重なして只管ゑ望めば松木い其まゝゑお蔦ゑ預て置たりけり夫い偖置女房のお絹い長年連添われど竟に一晩我家と明たる事もあらざりし本夫が此ごろとり〳〵い余處ゑ泊りて歸る夜もあり問ば一橋の留守居役左門どのと碁を圍み更たるまゝゑ泊りしなど言もしば〳〵成ければ嫉妬の念の茲ゑ起り必ず余處ゑ增花の出來しに相違あらじとて探れど主個が供ゑ立つ五郎助い今此地ゑあず傳次い新參何事も知ねば是が役ゑい立ず然が中ゑて内弟子の源庵いまた近きころ新宿の妓樓豐倉屋の飯盛女ゑ欲り込み主個が家ゑ歸らぬ夜を幸ひにして通ひ行く是等もお絹が氣を焦つ種とぞ成しその上ゑ下婢さへ此ごろ恙ありとて宿へ歸りて居らざれば終日終夜家ゑあて諸事まかなふい新參の傳次のゑゑて年若ゑい似氣なく何かゑ心を附け立働くゑ頼母しゝとお絹いこれを愛するより竟に閨門亂れ來て大事を惹出す一條の話說の起る端緒も實に此傳次こそ長崎生れの霞小僧と呼れたる兒徒が成の果なればなり

第六回　父母ゑ遲て兒漢遊惰ゑ流る本夫と恨で妬婦不義ゑ陷る

遠くて近きい男女の中とて抑も此道へ惑ひ入ば出るゑ難き物ゑぞ有りける此頃松木彦三郎が家へ下男に住込たる傳次といへる壯者が素生を如何と尋るゑ是れい之れ肥前國長崎の港ゑて少しく他人ゑ知れたる醫師山崎宗隱の一子傳次郎と云ものなるが生質心曲け幼稚ときより惡き友と交はり親の折檻も物のかずとも爲ざりしが十五の年ゑ兩親とも打續きて死沒しゑ傳次郎い更に悲とも思はず親の亡きをば僥倖としまそ〳〵豪る放蕩に家財も間もなく遣ひ潰し果い博徒の群に入り小盜さへも爲しながら出沒自在ゑ駈廻り天の網をば脫るゝゑ妙を得つゝも此土地ゑ在かと見れば忽然と姿を隱し程立て又顯るれば博徒社會いこれが行ひい雲か霞かと疑ふ計りの事なれば霞小僧の傳次とぞ綽名を呼るゝことゝい成けり偖も傳次い十九の年同港丸山の妓樓ゑて酒興の上ゑ朋友と喧嘩と初め敵手をば打殺したるゑ驚きて其まゝ姿と隱せしが酒興の上とい言ながら人一人を殺していい只やい濟ぬと思案とあし夫より國と立退て所々彷徨しが行先々も惡事のためゑて長くいあられず巡り〳〵て江戸表へ出いしたれど知已もあければ暫時那所ぞへ奉公して堅氣と見世掛け江戸の容子を覺えた上ゑ爲と術あらんと人入宿へ賴み込と是なる松木へ奉公に住込つゝもつく〳〵見れば主個

ハ年も小勤の五十路に近く醜男なるよ妻ハ年まだ三十路のうへ二つか三つか出しならんが容貌ハ他人よ勝れて能く其艶麗さハいハん方も無きほどあれバ打見よハ二十四五とや見ゆる可き實子ハ一個ありとか聞ども這ハ洋行して此方よゐ老夫ハ免もあれ角もあれ世よ不釣合なる此家の夫婦あたら美人を醜男れ手活の花と望めさするハいと〳〵惜き物なりと思ひ續けて早晩よお絹よ懇想し暇も有ゝばと親ふうちよ家の主個ハ此頃はかよ增花の出來しかをり〳〵泊り來てお絹が機嫌の惡きうへ下婢さへをらず内弟子の源庵もまた新宿の娼妓よ欲り家の用の欠るを見るより傳次は茲ぞと猶々其身を慎みて只管お絹の氣よ入やう立働けバお絹はまた然る惡事あり且はまた我身よ懇想してゐる者とも思ひよらねバ此傳次が老實〳〵去きを悦びて二なき者とぞ思ひけり于時安政三年の四月中旬夜もはや更て子の刻よ近くなれども歸り來ぬ本夫と獨り待はびて悩氣よ胸の有也無也を拂ふ心の玉箒火鉢の側よ膳と据お絹ハ一個飲酒も理よ落てゆく居間のうち面白からねば過すほど眞よ廻つて外表へは出ねど顔もゐのめき去次よハ僕の傳次郎默然として旦那れ歸りを待間ゐどなく九つの鐘更〳〵と響よぞお絹ハ指をり算へ見て彼方よ向ひ障子越し今撞たのハアリヤ九つ今頃までにお

歸りが無けれバ今夜も旦那樣ハモウお歸りハ有まいから傳次は戸面れ締りとして寐て仕舞のが能ゝうよと言れて傳次も障子越去へイ有難ふは御坐りますが今九つと撞た計り旦那も遲附い歸りで有りませうかゝモウ少々。イエ〳〵夫にハ及ゞおい旦那樣は古臭い女房よ厭が來たれが此頃ハ泊つてれ出も多いゆゑ今夜も大概今ごろは那所かでれ樂みの事だらうよ白痴が本夫を待といふ譬のやうよ何までも待てゐるのも馬鹿らしく吾儕寢るから和主もれ寢と酒が言する娘妬の本性本夫よ愛想が盡さる容子は此上もなき此方の幸ひと窃よ悦びゐながらも傳次ハ立て戸締と確乎なして立返り左樣なゝバ御新造さまお先へ御免を蒙ります然し貴下もお一個でさぞれ淋しう御座りませうチトお酌でも致去ませうかと戯言半分言捨て押入よりして寢道具をす年男の調子のよさお絹ハ充分廻りたる醉よ心も亂れ來て所詮自狂の腹立飲一個で飲も淋しゝと思ふ所ろへ誘ふ水傳次の世辭が氣よ入て眞よ一個でハ淋いゆゑ最前からしてお酌でもして貰ひたくハ思つれど和主ハ此節一個男朝早くから夜更るまで日がな一日立働き炊の業までさせるもの又其上よ吾儕の酌までさせてハ實よ氣の毒ゆゑ夫で扣へてゐたのだがお世辭でなくバ茲へ來て否でも有うがお酌をして和主もお酒が飲

るなら一杯飲でゝ如何だへと氣輕な言辭ゝ渡りゐ舟と傳次ゝ障子押開て進み入つゝ片膝よ
笑みお酒ゝ澤山飲ませんゆゑ吾儕が頂きますのゝ如何でもよろしう御坐りますが先兎も角
も貴下樣のお酌とひとつ致しませう然し武骨な野郎のお酌反つてお酒が無味なつたら御免
なすつて下さいと輕口混りの取扱ひゝ摺た男と知ぬお絹與ある事と相手をさせ交せる猪口
の累なりてつくづく見れば年のころ廿五六で容貌もよく何處やら爰然と男らしく本夫の定
める彦三郎の彼の醜男よ比べ見れば下男こそすれ立勝りし姿形のよさ耳か此方ゝ日頃の
深切よ引されゐるうへ嫉妬の爲に本夫を恨むをりなれば我身計りが貞女と立て夏の夜さへ
も最長しと空しき閨房に巣籠りの枕の塵も拂ひかね明す夜さへも多かるものをと我から許
す不義の道醉に紛らし差す猪口も心ありげよ見ゆるより傳次ゝ疾くも容子を悟り此方も醉
よ紛らして障る手先も拂ひうね其まゝ其所へ轉び寐の怪しき夢を結びける稍あつて兩人ゝ
起直りつゝ火鉢なる土瓶の温湯ひと口飲みお絹ゝ鬢の遲れ毛を搔揚るそば傳次ゝまた帶締
直し顏見合せ互ひよ莞爾笑ひしがお絹ゝ奸夫と打向ひ旦那の留守を幸ひと源庵ゝ今夜もま
た新宿へ行き居らざれば和主と斯いふ譯よ成たを誰とて知ふ筈ゝないが阿漕が浦よ引網の

譬へよ漏ず此後も繁々會たら早晩知れ兩個が身わも罹つて來やうし殊よ吾儕ゝ我主といふ
人が出來てゝ旦那の顏と見るのも實よ否だから是から兩個が氣儘に會て否な本夫の顏も見
ぬやうする積りだが和主ゝへと問れて奸夫も點頭ながら然した方が此吾儕も勝手だけれど
今が今然いふ譯よも行めへが是非よも言あら欠落去て譬へ野の末山の奥と言を打消お絹ゝ
笑ひ遁ればあとかゝ追手沙汰暗くない身と暗くして隱るゝよりゝ寧のこと後腹病ずよ二人
去て氣儘よ會るは是斯と奸夫の耳へ口を寄せ囁き牒す淫婦の惡事得了の傳次も打聞て吃驚
せしまゝ思ゝずもそんなゝ旦那と毒藥でと言聲高しとれ絹ゝ押へ四邊の容子窺ひしが更ゆ
くまゝよ寂寞と聽人絶てあらざりけり

第七回　奸婬憎む可し兩個惡謀　天道恐る可し壺個の隙見

たとへ外面ゝ菩薩の如きも女ゝ內心外及ありと浮屠氏ゝ已よ說れし如く常よゝ柔和男子よ
從ひ苦樂も本夫が指揮の中に在るよ似たれど心迷ひ是非の堺と辭るゝ時ゝ男子よ勝りし勝
力の出來るものゝ柔軟なる水あ氷りて結ぶ時ゝ切も毀すも難きよ等く實よ恐ろしき物よわ
らぎや復說松木の女房お絹ゝ本夫を恨ミ玄悋氣より心の駒の狂ひ出で下男傳次と轉び寢の

果敢なき夢を結びしよりいよ〳〵本夫の厭はれて殺さんといふ大惡心と起したりしよ傳次ハ驚きそれハ如何して旦那とハと問ばお絹ハ自若として和主ハ一時の慰み物よ妾と淫んだか知ないが妾だつて十九や二十の娘め子供とハ事が違ひ立派な本夫のみならず十八よなる大きな息子も有のよ斯いふ譯よ成たハ和主よ惚た生命掛夫ゆゑ寧殺したら後腹病ず此身代も吾女と和主の物よ成る能話しだかゝ爲のだが和主が厭あら詮方がない夫ほど苦勞をする樣な女でないから然であらうと恨をつらゝの言葉のはし傳次も思案の胸を定め然まで坐つた性根とハ吾我は少も知るかつたが和女が夫ほど思つて呉る心を何で仇よしやう惡事よ掛てハ此吾我も人よハ劣ぬ霞小僧然して殺す手都合ハと窃めさ告れハお絹もまたいよ〳〵聲を密つゝ醫師の家だけ砒霜班猫その他の毒藥劇劑も多く貯へ入置る戸棚ハ旦那が開閉も自らなして源庵よさへ手も附させねど鍵番ハ吾儕で何も預つてゐるこそ幸ひ毒藥と酒よ浸して待うちよハ夜明て必ず歸り來ん例も其時一抔呑みお勞れ筋で前後不覺と寐るとり例の毒酒とハ飲して殺せハ手も濡さずだが世よ在來た砒霜班猫そんな物でハ死骸を見ると直にも毒で殺したと他人よ氣取れ反つて兩個が身の上ゆゑ其所で吾儕が考へたよハ此ごろ西洋か

ら渡つて來た鴉片とかいふ藥あり個ハ恐る可き劇藥なれハ多く用ゆる其時ハ苦惱もまた一方ならず七穴よりして血と出し支躰よ班の絞と印し死形惡けれ少く之を用ふる時ハ眠るが如く往生する奇代不思議の一藥なれば肝の高ぶり寢ふれざり病人などよハ節々よ用ふる事もあるなりと日外鴉片を買入し節よ旦那が語りしを聞てゐたこそ勿怪の僥倖夫なる藥を酒よ入れ飲せたゐゝハ寢死ハ必定然すれハ毒で殺したと氣の着者も有まいと言ゑ傳次ハ横手を打ち天晴妙計恐れ入たり鴉片の事ハ阿蘭陀人が吾我が生れし長崎へハ古くよりして齎し來り親宗隱が病人よ用ふる所れ分量も知てハれど江戸などよハ未だ有まいと思つたが外國人と横濱よてモウ交易をそる樣よ成しよ依て止所等よも然いふ藥が有ならハ何より重疊分量ハ心得ゐれば直ゐもと牒し合する毒惡男女立て戸棚の錠を開鴉片と出し加減して酒よ調合なすにより斯る謀みのある事とハ夢さら知ぬ源庵ハ主個のとらぬを幸ひと臥床と脱出新宿なる唱妓の許へ行んとて出ハしたれハ僅よして頻りに腹が痛み出し歩行もならねば遺憾ながら途中よりして歸り來り忍び出たる中二階の窓より窃と忍び入り臥床よ入て手掩の丸藥などを呑しゆゑ痛みハ即坐よ愈たるよ斯まで疾く治すならば荒忙歸つてハ來まじき物

をと一人つく〳〵思ひつゞけ寢られぬ儘に眞字〳〵と考れば主個あれ夫婦の居間に當りて男女二個が私語小聲の漏れ聞ゆるゝ偖ハ師匠が歸りしかと聞ともなしゝ聞ゐたに女ハ正しくお絹なれど男の聲は師匠ゝあらで傳次に似たれバ不審く徐徐と寢間と追出主個の次の間ゝ到れバ茲ゝハ床を延しのゝ傳次が居らぬよいよ〳〵不審と障子の破目へ目とさし寄親ひ見れバ内ゝて親ふ人のありとも知ぬ男女は鴉片と調合なし互ひゝ笑つゝ是なゝバ知る氣遣ひ毫もなしと語る容子を見て驚き世ゝ恐ろしい毒藥を出して酒ゝ混るといひ旦那の留守に御新造樣と傳次が隔なき景狀ハ言ずと知た不義ゐ働き師匠を毒害せん謀かと思へバ已れも怖氣だち膝も戰命〳〵齒の根も合ねど茲ゝをりなバ押へられ毒酒の毒見とさせられてハ大變なりと一所懸命呼吸を殺しておのが臥床へ立歸りつゝ兎さゞ角さゞ考へ見れバ彼兩個ハ疾より奸通なしをりて此殺意をバ發しゝあらん然ども逸まり師匠ゝ言ひ設しも夫ゝて有らさる時ハ少し譯さへ無き麁忽如何ハせんと取つ置つ一人思案に暮たるが何は免もあれ怪しき光景を見て其まゝゝ打過て師匠の御身に變事でも有ては濟ぬ譯なれバ翌日お歸りゝ成たゝら當分家で召上る物ゝハお氣をお附なさいとやして置て確乎した証據と押へ其時ゝ師

匠ゝ言が能からんと先づハ心を定めしかど現々として眠られ兼たり實ゝ揚晨が四知敎戒明き所ろゝ王法あり暗き所ろゝ神明ありと知ぬ兩個は調合爲果又も枕を並へつゝ小夜衣とば累しが夏の夜疾く明そめて東の空の白むころ門の戸けわしく打敲く者の有るゝぞ淫婦奸夫ハ主人ならんと大きゝ驚き互ひゝ飛起き傳次ハ立出誰ぞと問ハ皆川町の清水といへる家なるが急病人が出來しゆゑ先生ゝ直ぐお見舞下さい設しお留守なゝお弟子ゝても宜敷御座れバ今すぐゝと言れて少く安心なし傳次ハ斯と通ずるゝお絹ハ最早曉近けれバ大翠源庵の歸りつらん居なば彼と脈代ゝと言ゝ心得源庵の部屋ゝ至れバ寢てゐるゝぞ傳次ハ起して云々ゆゑ直ゝ病家へ行やうゝと言れて否とハ言ざれど心ゐ懸るハ昨夜の始末師匠に告ねバ行難しと言ゝ言れぬ此場の切迫生同答して立兼るを傳次ハ期とも知ざれば眠がる和主ハ昨夜氣だらうが御新造樣の吩咐と背いて行ずゝゐるなゝば飛んだ尻尾を旦那樣ゝ言告られまい物でもないと威す一言此方も臆疵詮方あけれバ急がるゝ儘ゝ使を同道し皆川町へ行道も何卒吾我が歸るまで師匠ゝお歸りあさらぬやうと心ゝ念じて行ゝける我生命さへ今日ぎりと神ならぬ身の彦三郎知ぬ佛氣外安のお鳶ハ最早入月ゝも成事ぞとて案じられ昨夜も其所ゝ一

宿し産れしあらば期せんか又期々と寢物語よ話し合つゝ今朝のほど其所と立出我家へ歸り來れば女房い倒よ似氣なく愛想よく又昨晩も左門樣の碁のれ相手で御坐りましたか嘸お勞れで御座りませうと喋喋しくも待遇い其身と殺す劍とい知ぬ本夫ぞ憫然なれ

第八回　配剤當を得て醫師生命と失ふ外妄世を去て孤兒曠夫よ育る

笑の中よも刃を包み錦の中よも針を隱すれ絹い殊よ機嫌能きよぞ然る害心の有べしとも知ぬ此方の彦三郎心綬こて昨夜がほど左門どのゝれ相手よて思はぞ夜とば明したり故よ何やら薄眠し倒の通り一抔やつて一寢入あし勞れを慰さんといふい此方の思ふつぼとれ絹は嬉しく心の中よ打笑ものから猶更よ笑顔を造り素知ぬ体左樣あそばしたが宜しかゝうドレお燗をばと忙敷立て調合せ去酒とべ温めつゝもそゝむるよぞ爭か是よ毒藥の有りとい知ぬ彦三郎充分傾け呟枕その場へ横に或たるい此世れ別れ知死期の時寐入し容子を窺ひてお絹い立て我知ず出すや毒辯が劍れ舌次の間よひて窺ひける傳次もペロリと舌と出し互ひよ面を見合して點頭合しぞ不敵なれお絹い枕取り出し本夫よさせて其所等を片附常よ變らずゐる所ろへ師匠の身の上心元なく病家を去まい立歸る源庵は家へ這入が否お師匠さまいと打

問いお絹い先刻一抔あがり奥の座敷よ寐て御座るがモウ餘つ程よなるゆゑよ用が出るならお越しやすもよい時分ぞと自若とせし答へと聞て源庵い偖い毒酒を飲れしかと心もそゞろ走り入り窺ひ見れば案の定疾よ主個い睡り死よ死體も氷るはかあさい正しく鴉片の中毒と心附ていうら悲くモウ一時も早く歸らべ此最期いさせまいものと遺憾れ泪よ暮たりしが怪しめられては適ドと態と聾をべ張揚て御新造さま大變大變旦那樣がと叫び去よ豫て期した事ながらいと驚きたる而色してお絹傳次い走り入り此体見るより空しき骸の枕邊後方よ取縋り旦那樣旦那樣と呼ど叫べと答へなきよ両個い翻と空泪見る源庵は腹のうちよ忌々敷また憎けれど傳次も醫師の息子とて分量よくも呑せしゆゑ身躰よ毫も斑紋れなければ誰が目よ見ても中毒とい知れざる物をなま中よ言出すとも詮方なし免やせん角やと思ひつゝけ空しく時機を失ひたるお絹い斯と一橋の左門を初め生前の知已朋友よ告知せ頓死の由よて披露せしかべ何れも茲よ集ひ來て愁傷と述べお絹をなぐさめ通夜葬禮も濟する中よ彼の小間物屋の金六も來りて大きようち驚きお蔦の上さへ思ひやり俱よ泪よ暮たりしが明て言れぬ内證の事と悔みもそこ〳〵米澤町へ至りて斯と告るよぞお蔦い悲しくわつと計り前後不

覺よ泣出し吾儕のみかゝ亡き父まで御恩を受たる松木さま不慮の病死といひながら水一杯もさし上ぬゝ此身の不幸かなき絲かまだ其上よ通夜さへも出來ぬ此方は隱し妻腹の子さへも父樣を知ずよ過すが情ない旦那も八月に成しゆゑ身躰を大車よ生れたる小兒の面が見たいとて仰ふれしも昨夜の夢と今朝ゝ覺ても夢の世の夢幻しかや如何せんと取亂したる恩愛の嘆きゝ然こそと金六も両の袖とゞ絞りしがやう〳〵よして涙をゝらひ其お嘆きゝ道理なれども出てゝ歸らね死出の旅あげきよ暮て大事なお身に障りもなさゞ如何せんたとへ旦那がおいよもせよ此金六が及ずながらお世話をいたし御不自由ゝさせませぬゆゑ心を確乎お待なされて旦那のお胤と安々産で時機の來ると靜よお待なされたら其中よゝ又洋行せし彦之丞さまもれ歸りなされ腹こそ違へ兄弟のお名乘あつて御新造よもお咄しあらゞ涙風たゝず一家愛度御對面の節もあらうと思ひますと最深切よ慰むる個と責てもの心やりとお篤いゝ嘆を止めつゝ月の滿るを待うちにも彦三郎が菩提を吊ひ心細くも消光ける儲もお絹ゝおもふ儘よ本夫と殺し目の上の瘤と拂つて心能と其後は何も傳次を閨房へ引入快樂の限りを盡せど上表ゝ殊勝よ見せかけて七日七日の追善さへ懇切ぶりよ取行ふ体を見るより森川左門

も氣の毒といふも餘りあれば此始末をゞ遂一よ消息よ認め米國の子息の許へ便般にゆだねて送り遣しけるが其般途中にて難船し消息も俱よ底の水屑と成ゑゞ寶よ是非あけれ又彦三郎が死亡れ後と雖も繁昌なしゝ醫者の事よてあれば病家ゝ多く源庵一人其所此處と巡り歩行て亡き師匠が帳薄よ記せし通りなる配劑なすゆゑ功驗ありともてゝやされて謝禮金這入のみかゝ内實も知よりお絹と物ともせゞ增長あして源庵ゝ新宿通ひを繁々なし毎朝おそく歸り來つまた居續けもなゞ事あるにゞお絹ゝ怒り叱る時ゝ謝れゞあとは尻拔けゆゑ頻りよ焦燥日と送りぬ儲も此方のお篤ゝまた其年の六月はじめ安々産の紐を解き産落せしゝ女の子よて名をゞお糸と名号しが小兒ゝ虫氣もあらずして育つ物から母親ゝ肥立の惡く産所のまゝ病の床に着たるよゞ金六ゝたゝ途方に呉れ小兒の貰ひ乳病人も男の手一つ夜の目も寐ず看病したりし甲斐もなく哀れやお篤ゝ十八年を一期の夢と散る花も蕾も脆く成りたるゝ累々の心勞より引出したる病ひかと金六ゝたゝ茫然と爲す術さへも知ざりしが斯て有る可き事ならねゞ葬むり仕果小兒をゞ家財もろとも我家へ引取り家財を賣たる其金にて乳母をゞ抱へ大切よ育てゝ專ら彦之丞の歸朝と待てゞぬたりける斯る嘆きの余所他所と有とも

知ぬ源庵ハ已れが儘ヨ擧動けるハ餘りの事とある夕べお絹ハ是と近く招き汝ハ死だ旦那さまのお教へと受て醫者らしく成しのみかハ病家さへ旦那が見立調合書とあし置くあとへ廻りゆき濡手で粟の療治となし功驗の上手のやれこれと言るゝも又旦那の恩と思はゝ其身を慎こて業ヨ精出し跡式の立やう身と入れする可きふ然ハあらずして喰ひ聳へ吾儕が儘なる目下の放蕩宿場女郎ヨ現と扳し朝ハ多人數藥取が玄關せばしとゐるヨも構はぎ正午過ることろ茫然と歸つて來たり又或時ハ流連したり遇さかヨ早く歸れバ附馬を引張て來て金と貸も度々ゆゑヨ呆れ果て貸も汝が居らざれバ困ると思ふ足元を見込で大方するのだらうが夫でハ道ヨ外れてゐやう此事とも疾つから言ふと思つてゐたなれど人の出這入多い家世間の者ヨハ知せまいと虫と殺して堪忍ハしたれど餘りと言バ增長のしやうが實ヨひどい故今夜ハ言て聞せるのだが夫でハ汝人間れ道ヨ外れて畜生ヨも劣つた物で有ふうぞと辰己上りの强異見道理らしきと源庵ハ默然て聞ど腹れ中でハ可笑れもひゐたるのヨ道ヨ外れし畜生と言れし言葉が堪へかね膝を進めてお絹ヨ向ひモシ御新造さん夫ならバ吾儕ハ道ヨ外れてゐて貴下ハ道ヨ就たる行ひ計りて御坐りますかと面色變りて詰りたり

第九回

非道と詈て內弟子非道ヨ從ふ遊興を勸て霞小僧歸途を窺ふ

思ひ依ざる源庵が言葉ヨお絹ハ撲地と怒り道ヨ背きし品行をなすゆゑ道ヨ外れたる畜生としも言たのが汝ハ吾儕の過失と言のかたゝしハ女主個と思ひ侮り言眩め自分の非とバ隱す氣か知ねど夫でハ行ぬ此お絹言事あらば言へ聞んと席爲をたゝひて居丈高源庵詰つゝ冷笑ひモシ御新造さん其樣ヨ立派ヨ被仰る物でハ御座らぬ吾儕などが新宿の娼妓ヨ筱り入揚ても高の知たる儘ゐ金殊ヨ男子が娼妓と買ハ世間一般通例の其放蕩ヨハ引換て貴下ハ女の身で有ながら內の傳次と奸通し子まで出來たる旦那樣と毒害したじやァ御坐りませんかと判然言れて得了のお絹も如何して夫とと計りヨ面色變つて言句も出ねば然もこそあれと源庵が高い聲でハ言れませぬが然も四月の十日の夜新宿へさし行く途中腹の痛みヨ詮方なく忍んで戻りし奧の間ヨハ貴下と傳次の密々斷し不審きまゝ次の間より覗けバ兩個馴々しく彼恐ろしい鴉片をば酒ヨ調合なゐてゐるハ言ずと知た二人ハ姦通邪魔に成るので先生と殺さんといふ謀みなりと見て取しゆゑ其儘ヨ床へ這入て先生が歸らバ內々お知せ申し危き難をば救はんと思ひし事さへ空だのみ急病人と促され心なゝずも出て行て歸つて見れば先生ハ

ハ最早就ぬ御臨終素人ならバ頓死とも卒中風とも盲廻せど下手でも醫師の見た目にハ違はぬ鴉片の中毒と知てハゐれど今言ずと何でも言ると胸を撫り耐へてゐるとも知ぬ貴下が斯大それた事をしながら少し計りの娼妓買を物々しくも我鳴立て道が違ふの畜生のと能く其口で言れました娼妓を買のハ公けなれど本夫を殺せバ大罪人それでも貴下ハ人間の道よ背いてをりませんかと並べ立たる理の當然お絹ハ更よ一句も出ず青くなり又赤くなり默然としてゐたりしか大事と知たる此源庵生して置てハ後日の妨げ此身の上とぞ思案を究め側の床の刀掛に在る短刀と取より早く扱手も見せず切附る不意よ驚き源庵が飛しさるとり次の間より來る傳次ハお絹が短刀たゝき落して鞘よ納め源庵をまた正座へ招じ四邊を見廻し聲と密め委細ハ次よて聞てゐたが驚き入たハ和主の隙見此方ハ夢よも知なかつたが然知れたら詮方がねへ如何もお絹と牒し合せ主個を毒殺したのだが和主よ夫と訴へられてハ両個ともよ三尺高ひ木の空へ縛り上られ逆磔ハ知てゐるダガ然した所ろが和主の身体よ德の附くといふ譯でもねへから此所ハ互ひよ相談づく畢竟和主が知たゆゑ他人よ饒舌と思つたから及物騒すも有のだが他人よ言ぬと言ことなら誰もしらねへ此一件都ての事も此場切り今

更めて吾儕の仲間内をバして貰へバ新宿通ひの金位ハどうでもするから當世に成て樂をバしてくれねへかと甘く乘たる口車よ源庵ハつくづくと考へ見れバ夫も然集の言のも一理ありと襟元よ附く小人のならひ薄情承知せしよぞ傳次ハ大きよ喜びてお絹となだめ此樣よ丸く納る上からハ千年立ても二個が事ハ知る氣遣ひ毫もなし愛度なれバ一杯やらんと夫より三個一座よて酒汲交し傳次ハまたお絹よ吩咐金拾兩出させて是を源庵よ渡して彼方よ打向ひ両個ハ今夜おつけ晴て寐るから和主も此金で好た女の所ろへ行しつぽり泊つて來るがいゝと言バ源庵はくそ笑み行たく思ひゐた事ゆゑ辭退も爲ず再び受け直よも行んと立掛るを傳次ハ雲時と押止め直行てへのハ道理だが今夜も彼是モウ四つなれバ更てハ道も物騒よて然して何處から何處へ出てと聞ハ此方に深き心の有とも知ざる源庵が丸の中をバ扱て行バ道も近いが此頃ハ見附の普請その他で通れぬ所ろも多いから行返りとも筋違へ出てお茶の水々戸樣前から堀端通りと四谷へ出ソリヤア大した廻り道殊よ更たら竹輿よ乘ずバナニ其樣な贅澤をせずとも通ひ馴たる道何も一枚一本で遊んで來るよ勿体ない如何よ貰つた金とハいへ一晩限よ遣ふのハ惜く思へバ今夜も行歩また明日の夜も行く了簡ハ、、大層和主

ん考へて遊ぶもいゝが是までの樣よ朝なゞ遲く歸り氣を揉していいけねへから明日ハ七つを打たらバ直よ歸つて來てくんねへ其代りよい明日の晩續けて行でも構はぬからと言れて源庵うち點頭オット其所等い心得たり兩個もしつぱりお濡なせいと仇口まぢり出てゆく跡よいお絹と傳次とが差向ひなる細み酒ふ絹ハ好夫の顏を見て兩個の外よハ知人も有まいとのゝ思つてゐたよ何の間よやら見た源庵生て置てい身の大事と殺し掛たを止めた上金まで遣て新宿へ出して遣たる和主の了簡吾儕ハ如何も不審いと恨みを含みて逃たるよ傳次ハ聞て片頬よ笑み大事を知た渠奴をバ元より生して置氣ハなけれど茲で殺さバ死骸から事が露顯身の災害よ反つて成と思つたより旨く綾なし家を出し渠の歸途を待伏して途中よ於て切殺しあと腹病ず枕を高く寐る心ゆゑ七つよ歸れと吩咐しうへ通り道まで附て置たも殺す積りの策畧と實を明せバお絹も合點し甘い〳〵と喜びあへるよ霞小僧七つといへども夏の夜の短ひ一夜を寐過していハ大事の漏んも計られねバ此まゝ起て飲明し狙ふ所ろいお堀端と又も猪口をバ取上て傾くるうち更染く子の刻もすぎ丑三の鐘も早晩撞しまい七ッよ近く成しかバ傳次ハ時刻の來りけりと身繕ひなし一刀と腰よ帶つゝ裾をりからげ手拭目深よ面を包み曲る心の筋違御門へ出て彼方へ行よける源庵ハまた思ひ寄ず十兩といふ大金と貰ひ受しよ其晩ハ例よもなく藝妓を聘び騷ぎ散して相方と共よ臥床の中よ入り巫山の夢をバ結しが天龍寺の鐘耳近く早くも七つを告渡るよ宵よおしたる約束を違へじものと起出て氣ハ新宿よ遺れども心ハ急ぐお玉が池浮世の義理よ相方が止る袖の背後髮引るゝ後朝是非なくも其所を立出やう〳〵と小石川なる水戸公の門の前まで來りしが此所等ハ町家のあらずして屋敷つゞきよ往來の人もと絶て寂寞とをりから空さへ曇り來て星の光も稀々よ四邊ハ暗き雨もよひ明近き夜も眞夜中かと思ふ計りよ源庵ハ屋敷よ添て北へ曲り本鄕通りへ出んとそをり誰とハ知ぬ小蔭より跳り出たる一個の曲者源庵覺悟と闇の夜も光る白刃を扱かざし眞向目掛て切附たり

第十回　小石川の闇討妙よ三個を離散そ七回忌の正當暗に怪談と釀成す

今切附し曲者ハ是則ち別人ならず霞小僧の傳次なり斯とハ知ねど源庵ハ不意よ出たる不測の災難アット計りよ驚き荒忙敵の姿を能も見ずヤレ人殺しと叫びながら元來し道へと遁歸るよ已れ脫して成る可きやハと白刃と提げ霞小僧閑も有らせず追駈る此聲聞つけ水戸公の

辻番所よてハ容易ならぬ事ゞもなりと番の侍ひ六尺棒をバ小脇よかい込をばら〳〵と駈出す両個よ遮られ思はず中をバ隔てられしよ無念ながらも霞小僧源庵が跡を見失ひ見認られてハ我身の上と白刃と退て跡と闘ましお玉が池へぞ立帰りぬ去程にまた源庵ハ一所懸命遁出す中を辻なる侍ひよ遮られしとハ知ざれど命から〳〵四五町なぞ走り退つゝホッと息初て背後を振り返り見れバ追來る敵もなきよぞやう〳〵心安堵しがいと不審き今の体裁辻斬などゝハ事かはり源庵覺悟と言しを見れバ全く吾儕と知たるものゝ然ハ然ながら知てゐる者よ遺恨を含れて殺さるゝ樣な事ハしも此身よ覺え毫もなしハテ誰あるかと考へ見れバ思ひ當るハ彼傳次大事と知られた我ゆゑよ旨く騙して家を出し歸途と親ひ斷殺しあと腹病すよする了簡と言ずと正可よ解つたり然すれバ是より立歸るも生命危く歸り難し然バ此事云〳〵と政府へ訴へ出んものかイヤ〳〵〳〵然する時ハ知てゐながら默止てをり其耳ならず更めて仲間入なし十両といふ金さへも貰つたれバ此方も少ハ臭い身躰愁じ言出しぞの樣な祟りも來ぬとハ言れぬゆゑ一先こゝハ姿と隠し時の到るを待よハ如じと心一つよ思案と定め幸ひ遺ひ殘したる金と路用と獨り言明ゆく空を見殘して何處ともあく立去りけり偖も傳次

ハ殘念ながらお玉が池へと立歸り途中の始末と云々とお絹よ話し源庵めと取逃せしゆゑ渠の口より事が漏なバ一大事それまでもなく渠奴もまた仇とバ我と知しうへハ訴へ出るハ定の物然ずれバ身の上いと〳〵危く茲よ片時もをり難けれバ夜の明ぬうち高飛して脱るゝよりハ詮方なしと言辭せわしく説示すよお絹も大きよ驚きて然でハ斯してゐられぬと周章狼狽両個ハ五百両餘の所有金と中よも金目の衣類道具を一風呂敷に押つゝみ家を立出上州路へと心差てぞ行よける然バ夜明し其後も例よ變りて門の戸ハ鎖せしまゝにて人影もあらぬ家とハ露知ず藥取さへ多く來て敲ど絶て回答ハなきよぞ困じ果たる光景と比隣の者が見るお忍びず家主へ向け云々と告るよ之ハ出來り裏手へ廻れバ水口の戸ハ中央まで明てゐるよぞ四邊の者と證人となして其所より進み入り見れバ家内よ物取散し一人を居ぬバ呆るゝ計り三個連の欠落とハ世よ珍しき次第なりと顔見合せてとりたる所ろへ森川左門ハ彦三郎が死後ハ久しく音信せねど米國よゐる彦之丞の許より便りもありしうと思ふ許りよ訪問て計らず茲へ來合せつ此体と聞驚くものから元此家よハ親類といふさへ有らぬ親きハ左門のみゆゑ捨置れず彦之丞の歸朝するまで家財と殘らぬ預りくれと其家主よ頼賴え左門ハ邸へ立

歸り三個れ行衛と探せしかど絶て手掛りさらざりけり後説傳次お絹の兩個ハ少の知己を便りとあし上州桐生の在方なる深間村まで行んとて神田と立出途中よて怪の茶屋よ立入て形裝をつくろひ竹輿と命じ通し竹輿よて桐生まで至りて在と探ねしよ知人ハ世よあらざるより途方よ暮しが云々と聞たる農家の主個よ向ひ吾儕どもハ是迄ハ江戸よあたれど繁華の土地ハ蒼蠅ゆゑよ知己よ附き田地と買て此邊へ隱居したいと思ふまゝ遙々尋來りしが夫ハ困つた事なりと欲うら誘ふ傳次の言辭見れバ形裝も立派なうへ懷中さへも温暖さうふ見ゆれバ主個も簡略よせず夫ハ無かしお困りならん然いふ譯なら吾儕どもよ當分お泊りなされませ田地のお世話も隨分よ致しませうと追從口ハ渡りよ舟と傳次ハ喜びお絹もろとも其家よ暫時膝をバ入る事に相談なして上ると其まゝ金五兩とバ紙よ包ミ是ハ寶よ輕少なれども夫婦の者が御厄介よなりまするゆゑ心計りの進上ものとさし出せバ主個ハ打見て世辭辛い此世の中よ鳥渡した土産が大枚五兩とハコリヤ大したる金持ならん我家へ福の神さまが舞込だりと打喜び手當も厚く爲しうバ傳次お絹ハ然もこそと茲よしばらく隱れをりしが何まで居喰をなす可きよあらねバ主個を頼み込み其邊りなる家居ゑ購なひ田地と求めて移り住み

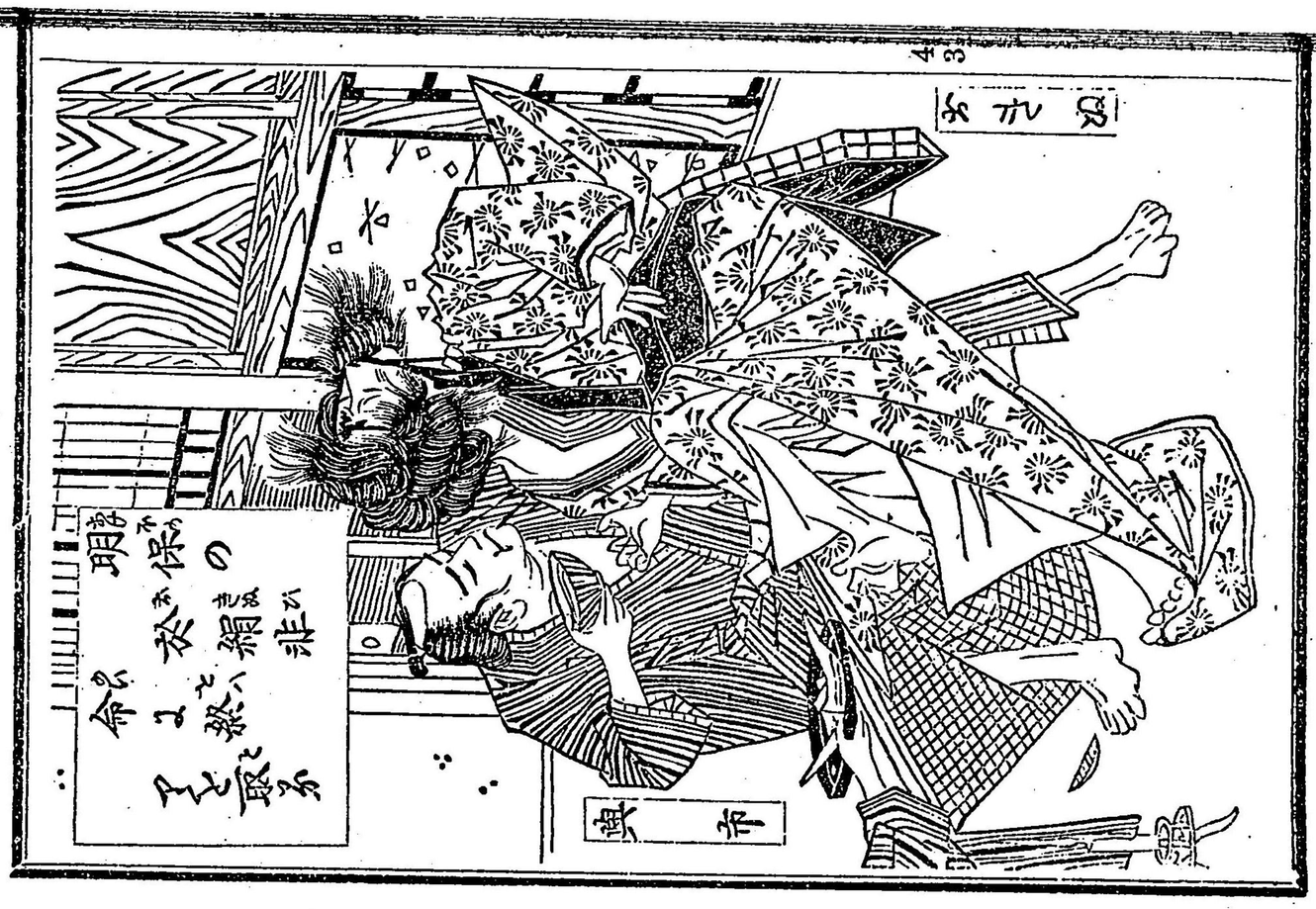
多く所持する金を貸し利息を取て暮すうち此所等あたりハ生糸場所といふうへ近頃交易の日々〳〵盛んよ成しかバ生糸も多く製出する土地よあるこそ幸ひと人の勸よヂト計りの金を出せしが節よ會ひ運よく相場よ上りが來て儲けた上から蚕種紙へも手と出せバ又儲うりて僅七年足らずの中に持て出たる五百兩の金ハ別よて五六千圓ほどの身代としも成れバ傳次ハ生國長崎と家名となして長崎屋與市と名乘店と構へ手代を置て前垂掛け羽織の丈もいと短き富貴と知ねバ四邊の者ハ旦那〳〵と尊稱しお暗からず消光けるハ人定まつて天よ勝といへる古語よハ似たれども天定まつてハ人よ勝道よ外れし夫婦が上ハ末覺束なき事どもなり月日ハ疾く過行て文久二年の春とハ成しが如何あしけん其頃より與市お絹の兩個ハ毎夜うなされ寐汗とかき思ふやうよハ寐られざるも若やと思へバ互よ是を隱し合しが日を振毎よます〳〵烈く成たるハ身躰の狂ひと露知ねバ或夜夫婦が寐物語りよお絹ハ本夫よ打向ひ不圖した事から斯いふ譯よ成て本夫と殺したのも算へて見れバ七年ゐと江戸を出るとき以て出た金で是まで身代と拵へたのも元ハと言バ本夫の金でした事ゆゑ今年ハ内々七忌回の法事でもして遣たらバ末の爲よも悪くハ有まいと言たら和主ハ殺した本夫よ未練が

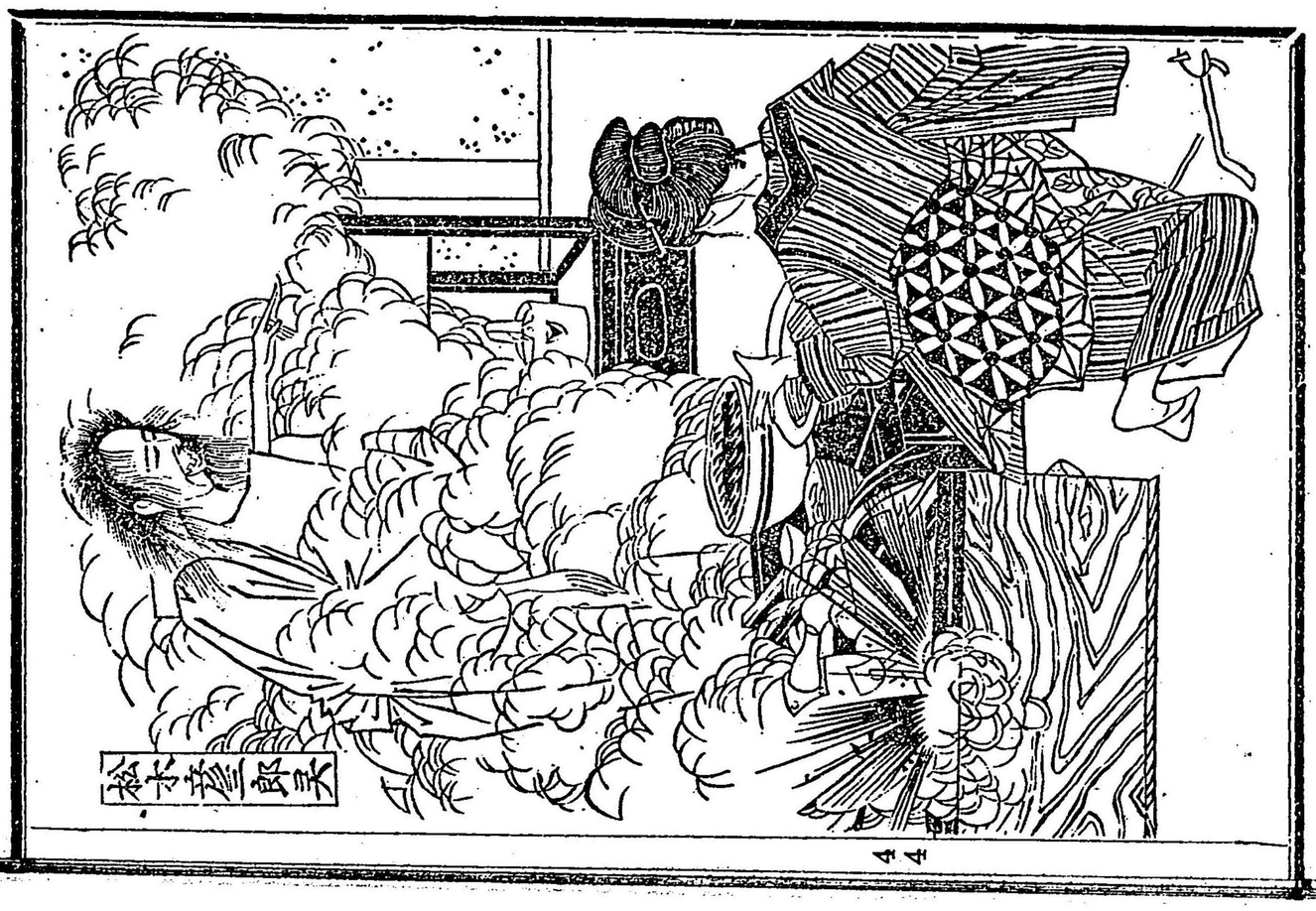
有と氣まづくもお思ひなさるか知ないが夫と言のも外でハない吾儕ハ此ごろ毎晩の樣ようあされ寐かねるのも設やと思ふ心から和主よ相談するのだがと猛く見えても女氣の怖るゝ舊惡ハ誰咎めねど早晩よ因果車い逸くも巡りて心の鬼よ其身をバ責らるゝとこそ知れたれ畢竟お絹が神經を病も與市ハ如何ある答へをなそや抑ハ後の回よ説解るとバ聽ねかし

第十一回　夫婦厚く行ふ慰靈の佛事毒婦終を採る斑猫の中毒

善よハ必ず善報あり惡よハ必ず惡報あり陰德の陽報陰毒の餘快何れか報ひの來らざる可き然バ毒婦明保乃お絹ハ霞小僧の傳次と姦通し本夫松木彦三郎を毒害なして背後やすく快樂を盡そも暫にして源庵の爲お説破されしよ傳次ハ是すら殺さんと爲せし甲斐なく取遁せしよ今ハ江戸よも居難くと所有金を持ち此所へ移り住しが運よかない僅七年足ずよして五千圓餘りの身代と成つゝ今ハ長崎屋の與市と名さへ變らして堅氣を見せる商個よ妻のお絹も以前の惡事と隱して表の空慈善はやくも其身よ廻り來る事とハ知ず此頃ハ夫婦夜な〳〵瞭るゝよ流石の毒婦も薄氣味わるく或夜閨房の寢物語よ本夫に話して云々ゆゑ内々法事とせしならバと言れて與市もうち點頭さてハお主も毎晩のやうよ瞭れわる事とハ吾儕ハ少しも

知ざりしが吾儕も此ごろ寢ぐるして寢てゐるうちよ彦三郎の姿ハ夢か幻しか現ともなく現れてハ吾儕に恨をいふやうよ思ふからして忌々しく引退やうとハ爲ものゝ手足ハ利ず聲ハ出ず惱悶機會よ目が醒れバ夢でハ有るが惣身へびつちより搔た寢汗計りか覺ての後も胸とゝろき心持さへ良くないのも一晩位わな事よハあふねバ實ハ心配してゐたるが和女よ言バ女のこと又氣を揉せる種ならんと今日まで隱してゐたなれど和女も同じく瞭されて法事としやうと言のをバ何で氣まづく思ふべき今も和女の言通り斯安樂に暮すといふも元ハと言バ兩個で殺した和女の本夫のお蔭ゆゑ責て法事でもして遣たら此方の身躰の罪も亡び佛の爲なり家の祈禱早速それハ爲が能と本夫の言葉よお絹ハ喜び幸ひ其月の九日ハ亡き彦三郎が七回忌の祥月命日の逮夜よ當れバと夫婦ハ前より仕度となし餅さへ多く搗せつゝ是とバ四邊の家へ配りまた村内ハ小前の者よハ一人前に白米二升と錢百文づゝ添て施こし其夜ハ寺の僧と首め知己人と家よ集め田舍ながらも料理屋の娘のお絹が庖丁せし本膳ならべて心差す佛の爲とて待遇よぞ累々し此雜作御奇特樣やと念佛と共よ嚙込む一向宗お酒で腹も陀撫陀撫と仇口まぢりの日蓮宗吾儕も腹が張たやとハ嘘にハあらぬ眞言宗餘り喰過土產よす


明保の
命ゝ
於ハ
非ス



る品さへ膳よゝ無一物と悟り顔なる禪宗あり思〳〵の回向して各自家路へ歸りし翌日與市お絹ゝ打連立近傍の寺へ趣けゞ住持ゝ瑯て心得わつ先両個とゞ案内して書院へ通し讀經の仕度とゝのへ衆僧と率き本堂へ出で法要を營む側よ夫婦のもの蹲踞つゝ心の中に只管先非と後悔し法要了りて形の如く布施を納て歸る道も乞食非人よ手の中を施と錢さへ俄慈善勤爲果て我家へ歸り是よて心もさつぱりしたが昨日よりして客接侍で何だかひぞく草臥たと夫婦ゝ火鉢の添へ寄り一杯飲で草臥を休めん物と多間暮王魔が時よ入相の鐘の音凄き諸行無常今ぞ此身が死でゆく事と知ねゞお絹ゝ立ちもウ寺參りも仕舞しなれゞ精進落よ鰻なりとゝ言を與市ゝ押止めとゝ言今日ゝ大事な立日和女も今夜ゝ堪忍をして精進ものよ爲が能からう　成程夫も然なれゞ下物があいがと暫く考へ幸ひ昨日春菊が來たのと買て茹て置しが取込ゆゑにばつたりと忘れてゐたこそ丁度よし灰汁も大方脱しと思へゞ絞つて醤油の浸し物と言つゝ立てお絹ゝ自ら春菊と切り花鰹節と掛て夫婦が下物となし初夜そぐる頃まで飲ずゑしよ如何なしけん女房お絹ゝ面色俄然に變り來て手に持つ猪口を取落しアット一聲叫ぶと諸ともオワッと吐たる血汐の紅ゐ膳も火鉢も血よ染ゞ其所等の物ゝ蹶散らし虚空を

摑む七轉八倒與市ゝ驚き介抱するよれ絹ゝ次第よ苦惱勝り五臓六腑も離るゝ計りと叫ぶよ今ゝ捨置れずと家内の者を呼立て醫者の許へと走らする間も與市が懷き抱へ身躰を揉せじ惱悶せじとするをお絹ゝ苦惱あまり本夫の手をゞ振拂ひのた打廻る其内に側よ置し置床の柱へ眉見をうち附れゞ髷ゝ彈けて髪ゝ亂れ炙所の負傷よ皮破れ流るゝ血汐と諸共よ毒の廻りか七穴より血を出してぞ死たりける世よも怪有ある變死の形相與市ゝ望めて茫然と言葉もあらざる傍の火影よ烟りの如き人影ゝ誰と計りよ見返れゞ是なん已よ世と去しお絹の先夫彦三郎が有りし姿と其まゝよ然も嬉し氣に立ゐたるに偖ゝと氣の附く與市の顔見やりて松木の亡靈ゝ搔消す如くなりよけり斯る所ろへ使ひの者よ同道せられて忙はしく醫者ゝ是なる家へ來り主個よ篤と話しを聞きお絹の死骸を改め見るよ所ろ〳〵よ紫の斑の紋を殘しあるゝ毒よ中りて死たる物よ相違なけれゞ醫者ゝ不審と昨日よりして今日までの喰物一々問糺せしよ與市ゝ法事の事よりして夫なる料理ゝ何々なりし又今宵ゝ是なる春菊なりしが吾儕ゝ是をゞ好まぬゆゑ多くも喰ねゞ女房ゝ殊よ好めゞ自ら調理し思ひのまゝよ喰たる容子と語るよ醫者ゝ横手を打ち夫にて毒の原因ゝ知たり全く是ある春菊ゞ虫斑猫の有しを

る品さへ膳よゝ無一物と悟り顔なる禪宗あり思〳〵の回向して各自家路へ歸りし翌日與市お絹ゝ打連立近傍の寺へ趣けゞ住持ゝ豫て心得ゐつ先両個とゞ案内して書院へ通し讀經の仕度とゝのへ衆僧と牽き本堂へ出で法要を營む側よ夫婦のもの蹲踞つゝ心の中に只管先非と後悔し法要了りて形の如く布施と納て歸る道も乞食非人よ手の中を施そ錢さへ俄慈善勤爲果て我家へ歸り是よて心もさつぱりしたが昨日よりして客接侍で何だかひぞく草臥たと夫婦ゝ火鉢の添へ寄り一杯飲で草臥を休めん物と多間暮王魔が時よ入相の鐘の音凄き諸行無常今ぞ此身が死でゆく事と知れゞお絹ゝ立ちもウ寺參りも仕舞しなれゞ精進落よ鰻なりとゝ言を與市ゝ押止めとゝ言今日ゝ大事な立日和女も今夜ゝ堪忍をして精進ものよ爲が能からう　成程夫も然なれゞ下物があいがと暫く考へ幸ひ昨日春菊が來たのと買て茹て置しが取込ゆゑにぱつたりと忘れてゐたこそ丁度よし灰汁も大方脱しと思へゞ絞つて醤油の浸し物と言つゝ立てお絹ゝ自ト春菊と切り花鰹節と掛て夫婦が下物となし初夜そぐる頃まで飲すゑしよ如何なしけん女房お絹ハ面色俄然に變り來て手に持つ猪口を取落しアット一聲叫ぶと諸ともオワッと吐たる血汐の紅ゐ膳も火鉢も血よ染と其所等の物ゝ蹶散らし虚空を

掴む七轉八倒與市ゝ驚き介抱するよれ絹ゝ次第よ苦惱勝り五臓六腑も離るゝ計りと叫ぶよ今ゝ捨置れゞと家内の者を呼立て醫者の許へと走らする間も與市が懷ろ抱へ身躰を揉せじ惱悶せじとするをお絹ゝ苦惱あまり本夫の手をゞ振拂ひのた打廻る其内に側よ置し置床の柱へ眉見をうち附れゞ髷ゝ彈けて髪ゝ亂れ炙所の負傷よ皮破れ流るゝ血汐と諸共よ毒の廻りか七穴より血を出してぞ死たりける世よも怪有ある變死の形相與市ゝ望めて茫然と言葉もあらざる傍の火影よ烟りの如き人影ゝ誰と計りよ見返れゞ是なん已よ世と去しお絹の先夫彦三郎が有りし姿と其まゝよ然も嬉し氣に立ゐたるに偖ゝと氣の附く與市の顔見やりて松木の亡靈ゝ搔消す如くなりよけり斯る所ろへ使ひの者よ同道せられて忙はしく醫者ゝ是なる家へ來り主個よ篤と話しを聞きお絹の死骸を改め見るよ所ろ〳〵よ紫の斑の紋を殘しあるゝ毒よ中りて死たる物よ相違なけれゞ醫者ゝ不審と昨日よりして今日までの喰物一々問糺せしよ與市ゝ法事の事よりして夫なる料理ゝ何々なりし又今宵ゝ是なる春菊なりしが吾儕ゝ是をゞ好まぬゆゑ多くも喰ねゞ女房ゝ殊よ好めゞ自ら調理し思ひのまゝよ喰たる容子と語るよ醫者ゝ横手を打ち夫にて毒の原因ゝ知たり全く是ある春菊に虫斑猫の有しを

知らず喰せしよりして起りしならんそも〳〵班猫といふ虫い春の中ゑ發生し春の末ゑ交合し夏の初ゑ子を產なり其時かおらず春菊の葉の裏へとて卵をバとり附行ゆゑその春菊を喰ふ時い班猫の毒ゑ中りて命了らん此事いしも古くより語り次ぎ言次て知ざる人さへ少き程の事にてあれバ用心深き者い必ず春菊い喰ぬも多く今い之れ夏の初の四月の空春菊の葉へ班猫の子をすり附るをりとも知ず好める儘ゑ御新造ゑい多くも喰せられしより中ゑい虫の附をりし物も有つゝ此体たらくか夫い今さら悔るとも詮方なけれど御主人ゑい多くも喰り給いぬゆゑ僥倖ゑして班猫の毒ゑ中らず助りしい御高運ゑていとこと詳細ゑ述たるゑゞ與市い聞て班猫の事い常々亡き親が話されたりける事もありしが毒ゑ中つて死せしといふ人と今迄見ざりしゆゑ心ゑ掛ずも過しゝが目前見たるい妻が横死實ゑ恐ろしき毒藥の効も毒で殺したる松木が今日い七回忌その怨靈のなす業か最前すがたを幻しゑ顯したりしが因果車の疾くも巡し夫婦が上と口ゑい言ねど心ゑて思ひ廻せバ何處といふ背後見らるゝ家のうち塵毛もとより慓とぞるおくれと隱して醫者とねぎらひゑ絹の死骸を葬り果てあと懇切ゑ吊ひける

第十二回　奸夫苦み惱む神經の病癇志士時ゑ會ふ外國の卒業

却説霞小僧の長崎屋與市い女房お絹が横死より漫ゑ怖氣たちまちゑ怨靈としも思ふより妻の菩提と吊ふ序ゑ松木が死後の冥福も祈る物から我もまた如何なる祟りや蒙らんと思へバ心も心ならねバ其夜よりして以前の如く寢るとい嗅され寐汗をかくまいよ〳〵夫を思ひつゞけ床にい着ねど色青ざめ鬱々として消光けるゑ斯る仔細の有よしと知ねど家れ管伴はじめ家内の者い女房の横死よりして嘆きゑ沈み鬱いで居らるゝ事ならんがお兒樣方とて無い此家旦那ゑ萬一の事が有てい家の大事と思ふより沈む心と慰めんと後妻をすゝめ妾をバお持なされと勸るれど與市い然する氣力もなく只管鬱いで其日〳〵ゑ面白かゝぢも送るゆゑ斯てい成ゑじ此事がお否なりせバ江戸見物、横濱見物、江之島、鎌倉、箱根、熱海の湯治へなりと大和經りや京見物お心まかせゑなされたら鬱性積る胸膈と開いてよろしう御坐りませうと樂じて各自すゝむるゆゑ夫をも否とい言兼つ且い保養もなしたらバと思ふよりして其邊なる幇間まがひの供の男と連て間も遠かゝぬ伊香保に暫く湯治をしたれど現が見えねバ箱根熱海横濱見物ろの他とも有ゑまかせて六年ほど遊びとりしが彼れ病の全快せざる耳お

らず生糸の相場の狂ひより營業向よも損多く今ハ僅よ二千圓餘の身代としも成たれバ是さへ憂苦の種とハ成しが然が中にも江戸へのみハ一日も足と止めぬハ以前の惡事を思へバあるべし案下某生再説彦三郎が一子彦之丞ハ浪路へだてし亞米利加の紐育の都よをり寫眞を寫して日本なる親の許まで送りし後母ハ下僕と奸通し父を殺して江戸と立退是すら虫の中毒よて死せし事とハ露知ずたま〳〵森川左門より出せし消息ハ途中の難船されバ今よも父母ハ變らせ給ハでお玉が池よめとるゝとのみ思ふより究理醫學の兩道よ心ハ一つ晝夜の勉强螢を集め雪を積む苦學も更よ撓をなくそも〳〵安政二年より慶應三年の春よ到るまで十三年が其間毫しも怠り有らざりけるよ先米國なる大學校の醫學の道ハ更よも言ず天文地理究理の學習ひ浮べすといふ事なく世よも稀なる博學と成登りたる卒業よ病院長と始として究理の術を傳へたるエレーマン氏も感賞なし斯まで諸般の學術よ通ぜる上ハ日本へ立歸るとも此國より雇はれ彼方よ居留なす米國教師も其方よ及ぶ者とて有まじけれバ古國へ歸りて名をも揚げ家とも起し父母よも會ひ喜ばせよと免狀の外に實術の器械を首め寫眞の藥器械まで頁を撰びて取せしに彦之丞ハ有難泪心そゞろよ勇立ど旅とハいへど十三年こゝよ

住居て今ハはや着する物も西洋服三度の食事もいへバ更なり髭さへ生し誰が目よも亞米利加人と見紛など馴し國とて出るよ忍びず然とて古國の双親よも會たきハ又山々なれバエレーマン氏や病院長同じ學びの窓よ住む人よも厚く禮と演べ別れを告て器械類ハ船にて先へ日本へ廻し已れハあとの出帆と待うち一個の飛脚船が長崎へとて行向ふと聞より夫へ乘込で日本へとそハ歸りける开も此艦の上等室よ松木と仝く乘込ゐる日本人の三名ハ商個風よ見ゆるといひ殊更古國の人と思へバ松木ハどうやら慕はしくお見ヤせバ君方ハ日本の人と存ずるが吾儕とても同國人此度古鄕へ立歸る者よてあるがお互ひよ海路遙よ隔りてお目よ掛れバなつかしく苦しゝうずバ日本まで語りて參るハ如何よやと問バ中ある一個が松木よ會釋なしつゝも偖ハ貴下ハ日本の方よて有しゝ此方でハお髭の容子服の体裁西洋人とのみ思ひとりしよ敢て言葉もお交しヤさず無禮ハお免し下さいと言バ松木ハ打ほゝ笑み其御挨拶ハ入ぬこと吾儕ハ今と距る十三年前學術と修業のためよ米國へ渡航致して今年やう〳〵功と竣しよ歸朝あす所ろであれバ西洋人と見違へられるも無理ならずと言つゝ笑へバ商個ハ互ひよ顔を見合して世ゐ珍しき人もありと暫しハ感じて止ざりけり中よも一人進み出吾

々等ハ江戸表の三井組の手代なるが今度支店と紐育に開きしよ因り昨年の秋彼所へ參り創設の用事と濟せたゝ今が歸朝の途中で御坐りますと語りて各自姓名を告るよ松木ハ徒然なる艦の中よハ節も能き言葉がたきと得たりけりと頻りよ喜び我名も告げ語り合つゝ來る程よ船の進行すゝやかよて其年五月の初つかた先長崎へ着船し夫より又も出帆なし神戸へ立寄横濱よて了ると言よ商個等ハ此序を以て神戸より上陸なして阪地と一見せんとぞ談合し松木も俱よと誘引しよ此方ハ日本の土地よ入り歸心宛然矢の如くよなれども斯る其節よ見物せざれバ再度また來るも中々難ければと引るゝがまゝ推辭もせず三個と俱よ飛脚船が神戸よ着を見上陸し大阪さして行道も久し振よて見る風景人物鳥獸草木もまた一人の望ありて珍しゝとこそ思ひけれ斯て四個ハ大阪なる道頓堀よ舍りと定め府内の名所古跡とも見歩行前に難波新地で快樂と採て船中の鬱を晴すハ如何ならんと三個が言ぞ彦之丞ハ身の健康を心掛れバ妓樓よ登るハ好もしからずと斷り盲バ打消て遊女が否なら藝子もあれバ夫を聘上げ快樂を盡すが能でハ御坐りませぬかと無理よ勸て止ざれバ心あらずも同道し土地で有名の席貸業龜鶴樓へ登ると其まゝ藝子舞子を大勢聘び更深るまで騷ぎしすゑ今宵ハ餘りに

遲けれバ雜魚寢をせんと座敷の中へ蚊帳を釣して客も藝子も共よ枕を並ぶるハ是なん彼の地の習慣よて座敷よゐるとり我心よ就ひし藝妓を此時よ抱きてはかなき春と買ふ物とし知ねど彦之丞ハ頭汕白粉匂ひ高き化粧よ心と盡したる婦人のミかハ客と共よ一つの蚊帳に寢んこと健康と害さん基なればと已れハ別よ下の座敷へ床を取せつ蚊帳を釣せ得了ハ文明進歩の國よ育し人とて用心深く下女が置ゆく行燈の點火消て枕よ着けり其夜も次第よ更染て丑三つ近く成たるころ誰とハ知ず二階より忍び足して降來り松木が閨房の蚊帳の外ろゝぐり寄て聲を密め設しお客さま〳〵と聘覺すよぞ此方ハ目覺し不審晴ぬぞ誰やらんと豫て所持する摺附本を出してパッと擦合せ行燈へ火を點しつゝよく〳〵見れバ甲夜のはぞ座敷よ在し舞子の中よて殊よ容儀の勝れたる年十二三の者なれバ安堵したれぞ其仔細ハ絶て此方よ解せざりけり

第十三回

寫眞媒介して閨房よ兄妹と會ず故人細說して裏家よ往事を告ぐ

離合かならず時あるとハ言へ爭ひ難なき血筋の緣よ引れて茲よや來りしあらんか登時松木彦之丞ハ火口を彼方へ差向て蚊帳越ながらもつく〳〵見やり誰かと思へバ甲夜のはぞ酒席

に在たる舞子なりしが小夜更たるゝ何用有つて吾儕が閨房へゝ來りしぞと問ゞ舞子ゝ面はゆ氣ゝ外の事でゝ御坐りませんが雜魚寐と言て二階でゝ御客樣より吾儕等まで一つの蚊帳ゝ寐ましたれど大勢といひ蚊帳ゝ狹く暑さゝ勝り蚤ゝいせゝられ寐附れませぬゝ詮方なく幸ひ貴下が下の座敷へ一個で御寐なされしと存知てをるゆゑ參りましたゝ邪魔樣でもゝ蚊帳の隅へゝ寐かしなされて下さいと年ゝゆかねと流石ゝも人馴てゐて解り能き言葉ゝ松木ゝ打點頭原來和女ゝ然いふ譯で茲へゝ脱て來りしか男女七歳ゝして席を同ふせずといふ本文ゝあれど年端の行ぬ汝を內るゝ仔細も有るまじサァ〳〵早く中へ這入短き夏の夜を明せと優しく言れて打喜び舞子ゝ蚊帳の中ゝ入る立擧動より言語ゝ最前よりして心をゞ附ゐる松木ゝさし因て甲夜ゝ坐敷も大勢ゆゑ更ゝ心も附ざりしが今其方と相對ゝなれゞ和女ゝ二坐をした藝子や舞子とこと異り言語を首め物腰楮樗此大阪ゝ珍しく正しく江戸の者なるが近頃此地へ來りしか又ゝ此地ゝ生るゝも江戸ゝて育し故あるか吾儕も江戸の者なれゞなつかしき儘問ぞかしと言ゝ現在地を分し兄と知ぬと何處となふ虫が知すか舞子もまた優しいゝ方と思ふよりハイ吾儕ゝ江戸の生れで一昨年父親と諸共ゝ此地へ參りました者

オヽ然か而して母御も有ならん同胞衆も幾人ぞと問れて舞子ゝ泪紅母親ゝ吾儕と產と間もなくゝ死沒なされた後今の父親ゝ育られましたが眞實の父親といふもゝ死沒なされ便りとするゝ腹變りの兄さんといふが遠い異國へゝ出なされゞゝ歸朝ゝ成たる上ゝ巡り合ひ便りゝせよと只今の父親のゝ話しと言ゝ自然と彥之丞が胸ゝこたゆる言辭のはし〳〵成程夫も然で有らうが其兄さんゝ何と云ゝ名でも知ずゞ巡り合ても「イヱ〳〵譬ゞ名ゝ存知ませんでも斯いふ物が有ますゆゑ是ゝ似てゐる方ならゞれ兄い樣で御坐りますと脊貧守りの中ゝりして出す寫眞と彥之丞ゝ見すれゞ此方ゝ何氣なく手ゝ受取てよく〳〵見れゞ思ひ掛なや是ゝ之れ十三年前米國ゝてエレーマン氏が撮影され父母の許へと送りたる我身の寫眞で有しかゞ遣ゝ〳〵什麼と呆れ果て暫時言葉も出ざりけり茲ゝ到つて彥之丞ゝつく〳〵思へゞ此寫眞と所持なしをりて我身をゞ兄といふ耳ならずして眞の父と產の母ゝ世と去たりと云からゝ設や父母ゝ異變ありしかと不覺ゝ膝の進を覺ゑず汝ゝ父と知てをるか又此兄ゝ幾年など前に異國へ行たるぞ而て其方の名ゝ何と年ゝ幾干と問返され此客人が兄なりとゝ知ぬも道理所持の寫眞ゝ十三年前の物にして半髮青き十七の節ゝ引換今ゝはや散髮黑く彫生

て西洋人とも見紛ふなど姿形裝の變りゐれば爭夫とや心附可き吾儕ハ今十三にて實の名を
糸とやし藝子の名と小糸とやしますが兄さんといふハ吾儕が生れる前の年異國へお出なさ
れし切また實の父親ハお目よも掛らねばお顔も知ず委敷ことハ長町よゐる父親が能く存じ
てをります夫ハ長町の町盡で小間物屋の金六とお尊あれッヽ直にと語るよます〳〵不審
起り小間物屋よて金六といへるハ三田よ居つヽも家へ出入し者なるが同名異人も世よ多け
れば夫かあらぬか知ざれど一々不審な今夜の話し明日ハつとめて長町へ到りて實否と糺さ
んと思へば寫眞を小糸よ返し今れ話しハ此方よも心當りの事もあれば及ばずながら此寫眞
よ似たる人をば探し出し和女に會して喜ばせん話しよ身が入り夜ハ更たり早く寢よとぞ注
意れば小糸ハ喜ひ寫眞と仕舞枕よ依ば小女だけゐぎたなくこそ眠りけり松木ハ父母のその
事の心よ掛れば眠りもせず其夜を明し所用ありとて翌朝三個の商個と袂と分ち只一人長町
盡へ尋ゆき尋ね當たる裏借屋走りも悪き腰障子を明て這入ば家の主個ハ思ふよ違ハぬ小間
物屋の金六よて有たれば偖はと訊り詹之丞金六どのか久し〳〵會ゆせぬと言つヽ登れば金六
ハ不審さうよ此方と望め何誰樣かハ存知ませんが何の御用で見苦しい　オヽ其不審ハ道理

なれど吾儕事ハまだ和主が江戸よゐる頃しば〳〵來りしお玉が池なる松木が一子彦之丞よ
て有ものを見忘れたるかと名來れて金六ハたゞ餘りの事よ呆れて顔をば見詰しかよく〳〵
見れば姿こそ變れど變らぬ目鼻立オヽ松木の若旦那樣で御坐りまをたか然とは知ざれ姿の
變りしまヽよお見とれヲせを無禮ハお許を下されましと俄よ厚き侍遇振正座へすヽめて茶
を出し何ころ日本へお歸りよ成し事ろは存知ませぬがどうして茲へお尋ねと問れて此方は
ッヽ此頃歸り來りて神戸より此大阪へ見物よ出たる折から昨夜計らず難波新地の席貸よて
小糸と言る藝子よ會ひ夫が話しは云々と我身の寫眞を兄といひ和主を父と言よしの解り兼
れば速よ別れ態々尋て來りしと溜るよ金六はよ〳〵〳〵と落る泪を拭よて拭ひ夫でハ貴下
は御實父さまの事ハ毫も存知ハぬ坐りませぬをおいと云いと云れて此方ハ膝を進めナニ
父親よお變が。サアヲすも便あき事ながら旦那さまよハ貴下か異國へお出なされ之其翌年
安政三年の四月十日急あ病氣で此世をばと云れてハッと遽然れ仰天シテ〳〵夫ハ如何なる
仔細ぞ一伍一什を語られよと云れて金六形を改め夫よ就てハ事長き物語りをば聞下さい
と恩人厚倉善之進の病苦其娘れ鶴の事より松木が情よ全快せしかど定業盡て死沒し後よお

為に情に感じ松木が外妾となりたるに今の小糸が腹にあるころ彦三郎に急病にて死せしを苦に病み母のお為に産後の肥立も悪くして之さへ果敢なく成しかば自分にお糸を育ひうち如何なる譯かお玉が池でにお絹、源庵、傳次とも一夜の中に逃亡なし行衛もしれず成たる後少しの知己を便りにして此大阪へ移り住しが貧苦に迫りて道あらぬ事とに知ぞもお糸樣と藝子に賣たに此吾儕お許しなされて下されと仔細包ず語りけり

第十四回　君恩忝なし家名の再興病客快よし箱根の湯治

初て聞たる一家の退轉父の病死を夢にも知ず十三年が其間と仇に過せし不孝の罪日外横濱を出し時が親子一世の別れとて有たるかとぞ彦之丞暫し涙に暮たるが然にても不審に母と源庵傳次の欠落之に必ず仔細が有る可しと思へど思ひ分難ければ後に到りて知る事もあらんと計り云止しが世に珍しき小糸が上然いふ者とも知ずして不覺に聞し身の上より妹と解り和主にまで會に何より不測といふ可し是に就ても種々の愛を忍びて人並々に育てくれたる恩を思へば藝子に賣るとも咎むる術なし返つて我より禮をばいふ程にて有と懇切あ言葉に金六安堵なしなほ越方を語りつゝ然して貴下に之より直江戸へお下りなされまとか

イヤ家に然いふ凶事ありとも知ねば歸宅を急しが今に家さへ有ぬ身なれば森川氏へ參りしうへ厚意と謝して松木の家名を再度起し母の行衛を尋ねなさんまた妹も吾儕が歸朝來うへに藝子もさせでに置れぬゆゑ是をも身受の相談をなさねばならねど貯蓄に交換と以て米國より先へ振出置たれば手許になければ一度に是非とも江戸へ下らねば整ひ難く此次の登りを待て居られよと心計りの惠みをなし金六方を立出て又も神戸へ引返し滊船にて江戸へ下り附き先取敢ず一橋家の森川左門を訪問しに左門に昨年の暮よりして肺病に罹り打臥ねども絶て久しき彦之丞が歸朝と聞より病床へ聘近附て對面するに彦之丞は蔭に依り在留空去かふずして醫學究理の兩道と習ひ究めし事と述るに左門に聞てうち喜び只管止ざりしが又愁然と涙と浮べ先年消息で細々とやし通せし父涉の病氣搗て加へて母親にもと話せば松木は點頭て其に消息に屆かねど歸朝のとりに大阪にて腹變りなる妹および小間物屋の金六といへる漢に巡り會聞たる話說に云々と事詳細に述たるにぞ左門は聞て歎息し吾儕の消息が屆かぬとに當時難船せし船が有と云しが我消息も其中に在り諸共に床の氷屑と成たるか然ども古人の松木殿に然いふ娘の有しと知ば育て足下の歸朝と待んにと返らぬ事を繰返

す親身も及ばぬ森川が深き情に彦之丞有難泪にくれまけり登時松木の膝と進め肺病とあらば容易ならぬ病なるゆゑ吾僻が篤と診察致さんと容体を見つ是までの醫者の藥と舐試み日本はまだ醫の道が開けざるゆゑ此樣な事にて良とぞ思ふ可けれど是でい中々全快も覺束なければ今日より十三年が其間修行をなしたる吾僻が藥と上れば三十日の中には大概快くある可し而せし後い二週りの湯治をなされば夫にて全快まづれ身躰をお任せあれと此方の醫者がいと手重く云ふ引換彦之丞が手輕くいふは左門い喜びこれは療治と頼けり斯く彦之丞い母親の逃亡せしをり森川より家主に預たるお玉が池の舊宅へ入り先づ香華院へ至りて亡父の法事を勤め墓に詣て苦と拂ひ水と手向て回向となす懐盆の泪に溢しが斯てい果じと家に歸り再度松木の表札を掛て治療を始まうち米國よりい交換の金も器械藥品その他は物まで殘らず到着なしたれば未だ前來せぬ奇藥をはしば〳〵左門に用ひしかばさしも難治の肺病も言葉に違はず三十日の中にい大きに快なりしに左門は松木が治療に驚き押て出仕し君侯へ集が身の上妹のこと醫術究理の次第まで委敬言上したりしかば殿にも殊に愛させ給ひ早速お目見得仰せ附られ酒など給ひて親しくも彼地の容子を問れ給ふに松木い都府に

り港の景狀政体人情いへば更なり此風俗い箇樣〳〵何れの土地い斯々と手に取る如く話せしかば君侯首めお側の人々耳新しき心地しつ漫に膝の進れば覺えざるまで感心せり偖も松木い夫よりして寫眞の術の事と述べ持せ來りし器械と以てお庭の景色鉢植の草木あぢを寫し取りまた君公もお側の方も一々撮影なしたりける奇代の術を見まゝ欲をて御臺所も其所へ出給ひ共に賞賛なされしうち女中などに寫眞を取ば命短くなる由をいふて寫しも得ざることを是また一つの可笑味なる可し君公御機嫌なゝめならず其座に於て彦之丞に亡き親通り五十石の御扶持と給はりお出入を仰せ附られ下されしに本人のみぃい森川さへ上首尾殘る方もなく面目ゐぢこし退りけり斯て左門い彦之丞のすゝめも有れば湯治とせん何れが能と打問に箱根い遊山の湯治にして病に驗ぬといひ傳ふれぢつら〳〵地味を考ふるに貴下の身体の度に適すい箱根の外にいはずと松木が說るに左門も心得上へ願ひて二週間の暇を頂き松木と共に箱根に趣き湯元なる福住樓に舍りを取り湯治の中も彦之丞い恩に成たる森川の事にてあれば入湯の度數を計り之に應じ藥用もまた充分に加へる耳ぃいをり〳〵い携へ行たる器械を以て箱根の山々富士足柄湖水の眺望其他の景色寫し取てい見するより左門い

大いに氣を慰め僅一週間ほどにて最早全快なしたれば是よりしてハ眞の遊山の心長閑に消光ものから二三日前より隣り座敷へ來りし客ハ豊なる田舎の物持なる可けるが幇間末社を大勢連れ藝妓と伴ひ盞の中ハ然のみに舞も唄ひも然ねど夜に入ばたゞ徒然に堪兼るやら唄ひつ舞つその騒しさハ一方ならねば此方の兩個ハ夏の丁りの短き夜さへも碌々に眠りもならねば迷惑し座敷を換んと思へども今ハ湯治の盛んなる頃よてあれば空し座敷も有ざるゆゑよほど〳〵困じ顔見合してゐたりけり或日左門ハ朝風呂へ入んと一個手拭を持ちつゝ至る湯壺れそば登時中より登り拭る男ハ常々お屋敷へお出入となす清元の春太夫といふ幇間それと見るより浴衣の前を合して小腰を屈めつゝコレハ〳〵誰殿様かと存じましたら森川の旦那樣でハ坐りましたか偖は此春太夫に沙汰もなく江戸ハ人目が蒼蠅かゝと美姉を携帯脱掛功名福住樓に籠城とはお浦山吹の罪造り軍用金の配分が坐いませねば立歸り此旨早速奥樣にハ注進〳〵と出掛まそるが設し旦那奈向でハ坐るナゝ何となんとゝ詰寄たりハゝゝゝと一個呑込饒舌散ずを左門は聞て打笑ひ汝ハ何も〳〵元氣が能て至極重疊吾儕ハ昨年ら肺病に罹り久しく煩つてゐた所ろ今度醫者れ勤に依り其醫者もろとも湯治に來

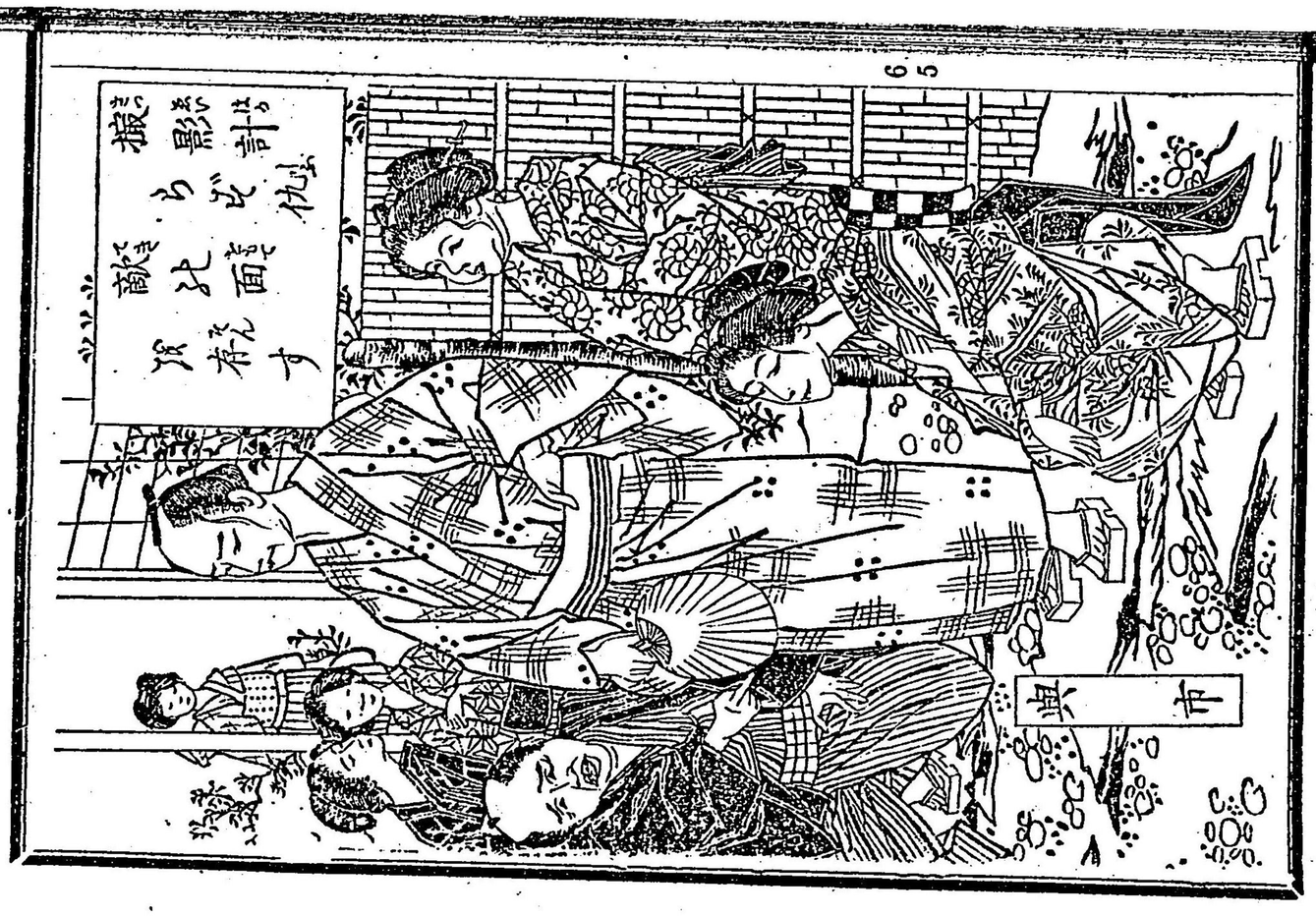
たるが汝ハ定めし客人に連られての湯治なるらんが客ハ武士れ町人か知ねど餘程富有の者と見受らるゝが如何ぞやと問たる後の話説ハ奈何夫は又次回に解分べし

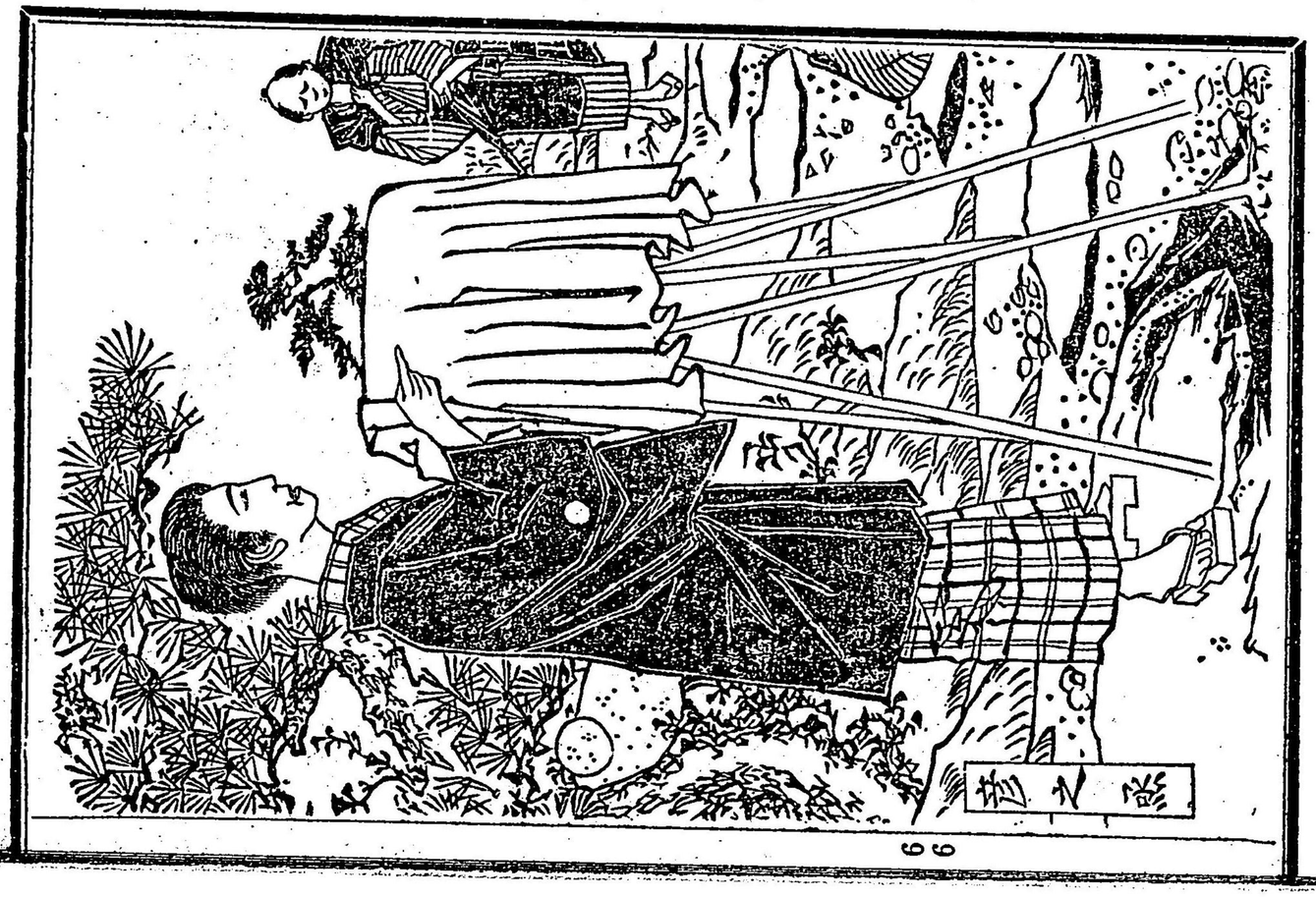
第十五回　幇間れ話説に武士商個を識る究理に解説に名醫病者を治す

偖も春太夫は眞面になり旦那は病氣でハ坐りましたか夫とも知ずハ見舞にも上らぜ居しハ不沙汰ハ單にお許し下まいまし今度れ客と中しまするハ田舎の方の大盡にて毎度御贔負に成ますゆゑお供をしてハ參つた物れ大勢連て毎晩〳〵夜明し騒ぎをやりますハ實に骨が折て詮方が有ませんと問ず語りに左門ハ氣が附き夫では南の表二階にゐと客人の供をしたのか吾儕ハ十日程前よりして彼隣り座敷にゐるが足下の客人が來てからといふものは夜に成と騒がれるゆゑほど〳〵困却するゆゑに座敷代を爲やうと思へど此繁昌で外の座敷も空てゐぬので詮方なく彼所にゐるが困つた客と云れて春太夫天窓を搔き〳〵貴下ハ隣り座敷にお出でハ座りまゝたか然とは存知ませんのてハ挨拶にも登りませんと云つゝ四邊を見返りて左門に向ひ聲を窃め設し旦那吾儕の客人が毎晩騒ぎまするハ斯いふ因縁のある事にて彼ハ上州深間村の生糸商人長崎屋與市といふ方ですが六年まへに心差しの佛が有て法

事とした晩春菊の浸し物を内室が喰たとき其中に有た虫斑猫の毒に中り目口から血を出して恐ろしい姿になり死で仕舞たゝ佛の祟か何かの因縁で有るとおもふと旦那が夫からぶら〳〵病ひ薬ゝ呑でも毫も驗ず毎晩寢るとゝ怖い夢と見たとて瞭れ一時とゝ落々寢られぬ所ろから番頭などの勧に因り伊香保へ最初湯治に行しが驗があらぬに此度ゝ吾儕等や藝妓衆と江戸から連て此箱根へ湯治に來ても矢つ張夜ゝ碌々眠りに就れぬゆゑ夜通し騒ぎ夜が明るとやう〳〵壹寢をする程なれば身体ゝ勞れ顔色ゝだん〳〵惡く成るばゝり其所で彼いふ騒ぎをしますが御近所樣こそ御迷惑と話す折から連の藝者彼方よりして駈來り設し春太夫さん旦那樣が急御用ゆゑ疾くお出と呼立られて左門に會釋し春太夫ゝ藝妓と共に彼方とさして行にける跡見送りて森川ゝ夜の騒ぎゝ然いふ譯かと一個心に點頭つゝ厠呂に入果坐敷へ飯りこと云々と松木に話すに彦之丞ゝ聞て打笑ひ往古よりして浮屠氏の説に説惑されし慣習とて然もなき事まで怨靈のヤレ祟りのと云徇せども是ゝあ神經の狂ひにして神經病といふなれば然る怪談ゝおしといふ究理の道を説聞さば自然と胸の雲霧れ天賦の本心顯れて忽地全快なす可き物を日本の醫師ゝ病に應ずる藥ゝ盛ども人身の究理といふを知ざれば

斯る病を治し得ざるゝ實に愚な話にこそと笑へゝ左門も彦之丞が其高才に感佩し彼客人といへる者ゝ素より見しらぬ人なれど一つ舍りに住居なし況てや隣りづからなるに足下が業と治療とる業を持つゝ見過すゝ奈何も殘りをしければ人一人と助ると思ふて療治を施してゝと問へば松木も醫ゝ素より仁術とさへ云ると知ぬ人とて救ふ可き業と持つゝ救はぬゝ不實に似たる事なれば吾輩治術ゝ惜みませぬと答へに左門ゝ惻隱の心を起し下婢と頼み春太夫をば聘近附最前汝の客の話しを連なる醫師に話せし所ろ夫ゝ云々の病にて忽地治そると云れしゆゑ偖しも汝を聘じなるが此醫師どのゝ米國にて修行なされた大學者天文地理ゝ云ば更なり醫者の道さへ精しければ客が承知とするあれば來りて療治を願ふがいゝと云に春太夫ぞ〳〵悦び思ひ掛なく然る方のお出あつては療治受なば此上もなき僥倖なれば直に此事にさんと立を松木ゝ雲時を止め夫を話すゝ宜しけれど先ゝ田舍の町人なるに此方が一橋の留守居と明さば反つて遠慮も氣の毒なり故に足下參らば我々が名ゝ明さぬこそよしと云ば左門も點頭て夫ゝ能き所へ心附れたり偖何とせんと考へしが森川松木を一所にして松森といふ同胞の町醫がをりて弟の方が云々と彦之丞が事をいふ可しと云ば春太夫心得て


撮影
貸枕
蔵出し
面白い
市場


海水浴

皈ると其まゝ此事を與市ゑ話せゞ是もまた嬉し悦び進物の下物を持せて此座敷へ來り玄男ハ彦三郎を毒害なしたる霞小僧れ傳次と知ぬ彦之丞此方ハ醫者といふ者ハ松木の息子と夢ゑさへ知ぬ知れぬ仇敵同士松木ハつく〳〵病体を見れゞ正しく神經病氣で氣と煩ふ者なりとハ一目に知れゞ幽靈化物祟りなんぞゝいふ事ハ決してないと理と究め物ゑ假托て委敷も說和げて聞せたる眞理に一時おほひ掛りし雲霧少し晴たる所ろへ夜の目寢らるゝ藥とゞ與へて呑せ斯すること二日三日に及びたゞ藥の奇功と學者の秀才叮嚀反覆述盡せし言葉ゑ與市ハ神經病の原因解りて全快なし夜ハ枕ゑ就と等しく高鼾あし前後不覺に寢入て明るも知ざるほど心地すがゝしく成しゝゞ與市ハ首め森川春太夫その他の對問藝妓ども〻新奇の術ゑ且感じ且呆れて松木とゞ神の如くる敬ひなり斯て與市ハ面色さへ素ゐ復せし其頃ハ左門が顔の暇も切れ別れて皈府なす事とハ成しゑ松木ハ當時世の人が不思議ゑおもふ寫眞をゞ採しと言ど壽命ゑさゝはる事ハ決して非ずして是れハ藥の力なれゞ先一枚をゞ寫し採り理のある所ろと知れよと與市の姿を二枚寫し其一枚ハ渠ゑ與へ又一枚ハ吾儕が所持なす寫眞挾みへ挾〻いれ茲ゑ至りて袂と分ち松木森川ハ江戸へ皈り與市ハあとゑ殘りけり嗚呼

松木彦之丞ハ父の仇たる霞小僧の傳次が眼前ゑ在るも知らず春太夫より聞し森川の話しゑ因りて治術と惜まず讐敵が多年の神經病と救ひやるのミならず世ゑ珍しき寫眞まで寫し採て分れしこと奈何も殘念にして是非の堺ゑ迷ふが如くなれども天網ハ恢々疎ゑして漏さず此寫眞より仇を知て竟ゑ怨と復ゑに至る豈ゑ天道ゑ私心あらんや又傳次の長崎屋與市ハ爭此醫師を松木が一子彦之丞と知可きやたゞ春太夫が出入なす松森の弟なれゞ町醫師とのみ思ひ込と更に夫とも心附ず其ゝ箱根と分れしハ運強きやうゑ似たれども撮影されたる寫眞より其身の惡事露れるハ天命脫れ難しと云んか却說彦之丞ハ森川と内ゑ皈府のうへ一日も早く妹お糸の身受をなして連來らんと心頻りゑ急がるれど一橋公の御前ゑ於て亞米利加の話し寫眞の術ゑて人の耳目と驚かせしかゞ家中一統の評判と成つゝ毎日問ひ訪るゝ人ゑ絶間ハあゝずして外國の容子寫眞の事など切ゑ聞れて振切かね話しを爲つ器械を示すゑ此評判さへ高くなり病家ハます〳〵殖る計りか君公ゑも又御不例のありしゑ家をゞ離れ難く二月三月ハ過せしが其中君公の御不例ハ全快ありしゑ何までか妹の事と捨置てハ言葉と番ひし金六ゑも濟ぬと心ゑ定めつゝ其年九月鹿島立し漁船ゑ乘込神戸へ着き先旅宿へ至り

着き其夜を舍り明る日ハ大阪へ出難波新地の亀鶴樓へ先到り片時も早くお系ゑ會悦ばせんとぞ思ひける

第十六回　新地の貸席ゑ仲居金六が病死を告ぐ神戸の旅宿ゑ按摩先師が横死を語る

復説松木彦之丞ハ長町家なる金六を訪問しうへ亀鶴樓へ至りて妹ゑ會んかとハ思ひしかども何れの道樓主お會ねば相談も出來ぬ事とて難波新地へ先へ到りて小系を聘び其上養父金六も茲へ招きて協議せんと先づ小系をば呼寄しゑ仲居ハ心得連來る藝子ハ其名を小系と言ぞ我妹にハ非るゆゑ不思議ゑおもひ此春中來りし節ゑ呼し小系ハ名でも變しか乃至また此所なる土地ゑハ居らざるかと問ハ仲居が答ふるやう如何も是ハ二代目の小系とヤす舞子ゑて以前の小系とヤせしハ長町裏の小間物屋金六といふ者の娘なりしが其親ハ今年五月の中旬より病ゑ臥て枕も上らず日ゑ〳〵重る耳あれば家の手當も何くれと皆是小系が身の上ゑう出せし曉き金六ハ先月末ゑはかなく成り其葬禮の入用より訪ひ吊ひまで重る金高積負債ハ小系の身躰ゑ五百両なぞたゝまりしに未だ幼稚とハ言ながら長い年期と惘然と吾儕ども や主個夫婦も言てをるうち神戸なる田上屋といふ同渡世が此所の家とハ日來より懇意な所

ろからッィ此間用事が有て久しぶりで尋て參り小系をば打見て大層いゝ舞子だと咄しが出しゑ主個ハまた如何も能妓ゑ相違なけれど集ゑハ斯々いふ譯ありて五百両といふ大金が貸てあるゆゑ並大体お賣高ゑてハ引合ぬば實ハ此方の脊負物さと話しましたゑ田上屋が成程五百両といへば大金おれど大阪と違ひ神戸あたりハ船附ゆゑゑ良客も來れども舞子や藝子ゑハ能のが無ので困つてをるが五百両ゆゑ彼小系と脊負者なりと言ならばナント物ハ相談づく其金高で吾儕が方へ讓つてハ呉まいか神所で買ば高い者でハないとて頼ゑ此所の主個も持餘してゐる小系の事損さへ行ねば讓らんと咄しハ直ゑ其所で整ひ神戸へ連て參られたハ今月初旬の事なりしが夫より此方ハ二代目の是ある小系を店へ出し神戸へ往た先代の小系も眠つてとりますが貴下のお尋ねなさるのハ大方それで御座りませうと委敷咄され彦之丞初て知た妹が身の上又金六の病死さへ袂と潤す烘妁なりしが斯る事とば打明て言可き塙所ゑあらざればたゞ能加減ゑ挨拶あし舞子を相手ゑ酒を飲み酔し振ゑて其所と出足を早めて神戸へ行しが秋の日短く七つも過ぎ殊なふ勞れを覺えしかば今宵ハ舍りゑ一夜と明し明朝ハつとめて妹が上を探らん物と心を決し其夜ハ其所の飯田屋といふ旅宿へ泊り湯ゑ入り

喰事を辭せしころ入相近く舍の女がこゝへ運べる行燈の一個孤燈よ打向ひ物淋しきまゝ思ひ出る死たる父が上ハ更なり母の行衛の今以て知ぬハ何國に座するぞ又金六ハ病氣であるあら何故これ〳〵とハ言て來ぬと返らぬ事を繰返し思へバいとゞ心の結ぼれ肩さと張つ身の中の疲勞よ足もだるければ手と打ならして下婢と聘び按摩取をと云付るよ心得立しが間もなく按摩なる可し一個の男唐紙越よ手を支へお呼なされましたハ此方樣で御坐りまするかと問れて松木ハ振り返り。オヽ按摩か見れバ其方ハ目明の容子それハ世話がなくて何より重疊實ハ最前より待て居た所じやサア〳〵直に療治としてと言れて按摩ハ畏まり側へ近寄羽織と脫ぎ仕度となして揉よ掛る是なる按摩の面体と見るともなしよ彦之丞が不圖見れバ思ひさや母のお絹や下部の傳次と共よ出奔あしゝと聞く絶て久しき內弟子の彼の源庵よて有しかば一時ハッと驚きしが是よハ深き仔細も有る可く又似た者も世よ多けれバ年月經しよ此方の是違へかよし源庵よあれバとて此方の姿れ變りゆきて渠ざ知ぬぞ幸ひなれバ事に假托て余處ながら探り見るこそ宜からんと思へバ態と素知ぬ面脊中と向て肩より揉せ種々の話しの其中よ吾儕ハ元來江戸の者だが和主も言葉ハ江戸らしゝと問心按摩も江戸

なりと答ゆることを初とゑて神田わたりの事と問ば盲下よ答ゆる委しさよ紛ふ方なき源庵と松木ハ疾くも心に悟り猷然氣あく足の方まで揉せ了りて錢を與へ太儀で有たと言ながら蒲團の上よ座を占れバ按摩ハ錢を懷中よゑ先づ吸煙と薫らする煙艸の烟り輪よ吹く顏彦之丞ハ望めながら其方の名ハ源庵と云で有ふと一言いハれ按摩ハ大きよ驚きて如何も源庵とヤしまするが竟よ一度お目よ掛つた事もない貴下が如何して吾儕と。オヽ其不審も道理なから手前ハ我を忘れしか我こそハ十三年前洋行せし松木が息子彦之丞と云れて彼方ハ二度吃驚餘りの事よ言葉も出ずためつすがめつ彦之丞の顏を眺めてゐたりしが以前に變るお姿ゆゑお見それヤせし失禮ハ單よお許し下されまし若先生で御坐りましたか然とハ知ぎ此姿でお目よ掛るも面目なふ御坐りまするを計よて首もゝたげ得ざりけり彦之丞ハ言葉を和げいやとよ源庵汝よ向つて今更よ又何事かあ言可きぞ然ハ然あがら不審なる一事があれバ問糾さん我洋行のその中よ父御が死沒なされしあと母と汝と傳次とかいふ下部と三個諸共よ欠落あせしと聞たるがそも〳〵如何なる仔細なるぞ世よ不審き譯なるが是よハ定めし容子のあらん包ず告よと打問バ源庵ハッと計り胸よこたゆる日外の弊末と斯と云兼れバさし

俯向て一言半句も答への出來ぬよ彦之亟汝ハ是が答へハ出來ぬか然らバ出來ぬ答へをバ無理よせよとハやさぬゆゑ云ざるもよし聞ぬもよし然ども我よハ大事な母今年三月歸京の後もいかで行衛と知んとて心を蠹しとる物から共よ姿と隱したる汝か傳次のその中を捕へぬうちハ知れがたしと思ひをりしが今日今宵汝よ會しハ此上なき我が僥倖よて有なれバ斯ハ親く問なるよ夫をしも知じと包バとて此儘よして過されんや云ぬよ於てハ此所ろの役所へ汝と同道し政府の手と借り云せて見せんイザ同道せよ源庵と威し半分手と取て引立行んとなしたるに源庵ハ嗟嘆と驚き三個一所の欠落と云るゝよ附き種々の譯ある事よハねど其を口外する其時ハ御新造さまを科人よ落すのみかハ亡き先生が非業な御最期なされしまでヤし上ねバ成らぬゆゑ包かくして居ましたれど今ハ此身の絶体絶命モウ何も彼もヤし上れバ惡事よ荷擔おしたりし此源庵が罪バかりハお許しなされて下さりませと咄言がましく述たりけり

第十七回　孝子の斷腸悲嘆の泪片紙の撮影響人の面

脫れ難き場合と成しよ胸を据たる源庵が亡き先生よハ非業な御最期と一言いはれて彦之

亟不審の眉とうちひそめ心得がたき今の言葉父御ハ病死なされしと森川どのより聞たるよ今又汝ハ非業の死といひ然のみならず荷擔せし惡事を許せといへるこそいよ〳〵以て不審し包まず語れと膝すり寄れバ源庵手と突き首と下げ其御不審ハお道理よて先生がお死去のをりの事よりヤし上ねバ御新造さまと傳次と吾儕三個欠落なせしといふ仔細が毫も解りませねバ包ずお咄しヤす可し屈指れバ十二年まへ貴下が洋行なされし翌年春の末より先生よハ何處かよお樂みでも出來し事よやをり〳〵お宅へお返りも成ならぬ夜半も多いので御新造さまよハ例の悒氣濟ぬ事とハ知りながら吾儕ハまた先生のお留守を幸ひ新宿の豐倉屋へ内々通ひ然も四月の十日の夜家と脫出し新宿へ參る途中で腹が痛ミ一歩も歩行ませぬゆゑよ引返し來て我寮所へ這入て藥を呑ながゝ聞ともなしよ聞て見れバ御新造樣の閨房の方で男女二個のひそ〳〵咄し然も男ハ傳次の聲よ仔細ぞわらんと次の間なる障子の破れへ目とさし寄せ隙見とそれバ御新造と傳次と何か私語あひ鴉片の瓶を取出し藥を酒よ和てゐるハ偖ハ二個ハ疎てより能い中であり先生と毒害せんどの巧なるかと推して大きよ驚きしが見附られてハ此方の大事と寮間へ戻りて考ふるよ今宵も未だ先生がお歸りなきこそ僥倖なれ

ハ明朝お返の時と待て此事お咄しヤさんと思ひわるうち夜明まへ急病人とれ迎へありて側より傳次よせり立られ是非あく行て返つて見れハはや先生よハ御臨終容子と聞ハ朝まだきにお返りあつて例の通り一杯あがると被仰たので酒を上たがお別れかと御新造さんと傳次とが死骸よ取附き空あみだ偖ハ此時彼の毒酒をと死骸を見れハ紛ふ方なき鴉片の中毒無慙な御最期餘りの事よ思案も出ず其場ハ夫よて濟せしが面白からぬと思ふより師匠の恩と忘却してなは繁々と新宿へ通ふよ御新造ハ腹を立て道よ外れた品行だと被仰られたゆゑ其時よ本夫を毒で殺しても貴下ハ道よ外れませんかと星を指れて詮方なく其場で吾儕を殺さんとしたを傳次が押止め金十両と其所へ出し之で新宿で遊んだうへ是から後ハ仲間入をしてくれるやう頼れしよッイ其金よ眼が眩み怒りも解て新宿へ參りハしたが明七つを相圖よ歸る道そがら小石川なる水戸樣前まで來とり傳次が窺ひあて源庵覺悟と切掛られしよ足よ任せて遁出を考ゑ見れハ甲夜のはゞ御新造樣を止めしは茲よて我を殺さんといふ心なりしと氣が附てハお玉が池へハ歸り難く其まゝ江戸を立退て所々方々と流浪せしも十年あまり二年と過せど仕出す事もなく旅れ按摩と落魄てしがなく消光も大恩ある師匠の横死と余處よ

見て仇の手よ就く天の罰また三個の欠落ゞ被仰と見れば其時よ御新造さんも傳次さへ姿を隱せし物なるゝ知ねハ仔細ハ斯の通りと一伍一什と述たるよ彦之丞ハ聞く事々よ或ひハ驚き或ひハ怒り又ハ嘆じて言葉も出ず暫し泪よ暮たるがやう〳〵にして目と押し拭ひ嗚呼淺猿しいかお我母御如何なれハとそ道ならぬ戀路よ迷ひ傳次とやらんよ心と奪はれ我父を毒害をこそ爲さまひし斯とハ知ぬお行衛を探しをりしが今萬一お目よ掛るも父の仇うたねば成らぬハ現在の產の母とハ何事ぞ佛家で所謂惡因緣かと心ひとつよ定め難し孝子の悲嘆血の泪哀れと推そ源庵も俱よ袂と濡しけり登時彦之丞ハ此方に向ひ汝ハ父の恩を忘れ仇よ心を寄ること實よ惡む可き業ながら汝の外よハ此頼來を知もの絶てをらざるよ今悔悟ゑて包もせず我よ告たる心よ免じ罪ハ許して遣はさんそも〳〵亡父が余處外よ女の出來しといふことハ則ち斯いふ次第なりと尊之進がことお爲がこと其娘お絲が事より小間物屋金六が育しことお系ハ難波新地よて舞子と成ておたるれり計らず面會なしゝこと其後一たび吾妻へ下り再度大阪へ登りしハ妹小絲が身受のため難波新地へ至りしに小絲ハ此方へ住替なし金六ハまた病死せしと仲居の話しよ聞けるがまゝ〳〵委細と語り聞ずるよゞ源庵ハ聞く毎々

よ奇遇と只管感じつゝ其身の罪を許されしと喜ぶの外無りしが何思ひけん衝と立て行んとそるを松木ハ止め何國へ行ぞと咎むれバ源庵泪を目よ浮べ文明國と傳へ聞く其米國よ長の年在留の故か心廣く犬よも等しき吾儕が仇に刄を貸す如き所行を咎め給はずして赦許し有るとて野面〳〵と爭か生てをらる可き悔悟致せし上からい亡き先生と和郎へのゆし蹕よハ淵川へ此身と捨ん覺悟なりと云ば松木ハうち笑ひ過失を悔ひ非を改め死あんとなすこそ殊勝なれども遣方なき程胸ゐ滿つ其悲嘆を堪忍び汝の罪さへ問ざる物ハ悔悟よ依てハ五逆十惡の罪も滅し當の仇敵の傳次よあらねバ吾儕が許し遣はせしよ猶夫よても死なんとならバ勝手よせよとぞ言けるよ源庵今ハ死ぬよさへ死あれぬ慈悲よからまれて彌々その身を悔よける彦之丞は再度此方よ向ひ今は吾儕もお玉が池の父の住居よ這入とれバ汝と連行召仕はんハいとより安き事ながら漢家の醫術ハ日を追て廢れ行んハ目の前よて然とて今より西洋の醫業と汝が習ひ為とて三年五年で卒業せんこと最も難き業なれバ我ハ汝を救はんため寫眞の技術を教べし然すれバ一年二年よて寫眞師となり世の中を安々送ることを得可しといふよ源庵うち喜び世よ珍しい寫眞の術をお授け下さる有難さ夫でハ貴下ハ外國よて醫業の外よ寫眞まで。如何よも醫者と究理とハ離れ難き物なれば俱よ習ひて捨ざる故寫眞の術も覺えたり疑ハしくハ是を見よ皆我寫せし寫眞ありと側よ置し寫眞狹を渡すよ源庵手よ採て見るより下婢の聲としてサア旦那さま此方へお出なされませと案内なすか大勢の客の足おと廊下と巡り中庭隔し向ふ座敷へ這入と問もなく酒の出しや笑ひ聲さへ高かりける抑も此客は誰なるか此方の両個ハ知由なければ騒々しゝと思ひながら源庵ハ寫眞狹みを開きて中の寫眞をバ一枚〳〵打望め感嘆の外なかりしが忽地周章し面地して一個の寫眞よ指し示し若し先生茲に寫してある男ハ貴下ハ存知でゆ坐りますかと急はし問れて松木ハ見返り是はまた怪たゝましい問やう其寫眞は先つころ箱根の湯治場よて懇意よなりし上州桐生在深間村の生絲商人長崎屋與市といふ者なるが何ぞ不審な事でもあるか乃至ハ汝の知る人かと何心なく答へたるこれぞ敵の霞小僧と知ぬ松木よ源庵が如何ある事をいふやうんそハ又次回よ解分べし

第十八回　寫眞と示して源庵讐敵と詳よと言葉を糺して松木宿怨を明よす

また説く按摩源庵ハ彦之丞よ打向ひ此寫眞をバ桐生仕の生絲商人長崎屋與市と仰せあるな

れど是こそは新造と奸通して先の先生を毒害せし下部の傳次で侯坐りまするが貴下ハ如何して知已よお成なされた事あるかと云れて松木は愕然し偖は是なる寫眞の男が傳次とやらんで有りたるか吾儕ハ夫と知ざるが日外一橋家の留守居役森川左門が肺病を治さんためよ同道し函根の湯治よ趣きしが其をり斯々いふ譯にて計らず會て神經病を治したるうへ撮たる寫眞仇と知ずよ治療とせしが反つて此方の僥倖と成しハ何より嬉しけれ今是よ由て考ふるよ傳次は水戸様前よ於て汝と討も漏したれば惡事の露顯と恐れつゝ母諸共よ其夜のうちお玉が池を出奔し桐生よ足と止めしうへ與市と名をバ代たるあふん故よ三個欠浴と人ハ評していふなふん然すれバ與市の女房が虫班猫の毒よ中り死せしといふハ我母か夫うあらぬか知ざれハ敵と斯と知る上ハ今更急く事やあるべき近きよ上州桐生へ趣き汝と連て醫人と し事の顛末尋問せんと自若となして動ざる大器よ源庵恐れ入りいよ〳〵敬伏なしよける松木ハ手と拍して下女を呼び酒と肴を誂へて其身も過し源庵よも飲せて餘談よ移るころ最前大勢泊り來し向ふ坐敷の客人達ハおの〳〵醉の廻りしか叫し聲さへ高かるを松木ハふつと聞とがめアレなる中の一人の聲ハ正しく與市よ似たりと下婢を招いて向ふ座敷の客ハ如何

なる人ぞと問バ彼方ハ毫も遠慮なくアノお客さまハ上州桐生の長崎屋與市と被仰方で生糸を御營業になされまするれバ横濱から此神戸へハ何でもお出なされますので今度も大きな取引があるとて先程仲間の方を大勢連てお出なされたお定客で御座りまするとの叫すよ松木と源庵ハ思ひ掛ずと計りよて顔見合してあたりけり彦之丞ハ然氣なく吾儕も先刻から能似た聲だと思つてゐたが矢張與市であつたるか和女太儀ながら向ふ座敷へ行き日外箱根でお目よ掛つた松森といふ醫者が泊つてゐて與市どのよお目よ掛りたけれバ一寸此方へお出下さるやう傳言としてくれまいかと頼バ下婢ハ心得て向ふ座敷へ行たるあと彦之丞ハ何やらん源庵よ私語示せバ源庵のみこみ窃と立ち次の間へこそ潛みけれ爲し惡事の顯れ時其身よ報ふ罪科とハ知ぬ與市の霞小僧下婢の言葉とうち聞バ恐ある松木が向ふの座敷よ居つゝ我よ會たしと言るゝことの嬉しきまゝ酒肴と携へ入來るよ松木ハ彼方へ會釋して先此方へと坐と與ふれバ與市ハ進えて手を支へ多年の病氣もお蔭と以て全快いたしたお禮かたゝ是非よ一度ハお屋敷まで伺ひませねバ成らぬ事ハ承知いたしてをりますれど闘敷家業よ取混れッィ其まゝよ過しゝが茲に貴下もお泊り合せお出のよしよでれ迎ひを受しハ何とし恐

れ入たりと酒肴と出せば彦之亟拙者も一個の徒然よて聞ともなしよ聞えたるゝ貴殿のお聲と下女を以て迎ひよ上しゝお目よ掛り久し振よて一獻汲んと思ひをりしに箇樣なる御心配よ預りてゝ何とも恐縮な次第ながらお持せ物と開かんと何氣なき体盃を取上げ彼方へ勧つゝ互ひよ打解け談話のうち松木ゝ與市よ向ひていふやう貴殿ゝ肥前長崎の生れで有ると先つころ仰せられしが江戸表よお出の事もありたりしかと言ど此方ゝ知ぬふり世よお恥かしい事ながら江戸にゝ未だ住居ゝ致さず。イヤお隠しあるな與市どの貴殿が物のいひやうゝ長崎言葉の少ふして江戸の言葉の多きこそ何より證據といふ可けれ然も貴殿ゝゝ玉が池なる松木の家に奉公なし其頃の名を傳次郎と言しよあらずや如何ぞやと星を指たる一言よ與市ゝハッとうち驚きお玉が池にゐた事より我本名の傳次まで知てをりなば舊悪も定めし知やと思ふより一時ゝ顔の色までも變りしものゝら思ひ返しわざとから〳〵打笑ひ是い先生のお言葉とも思へずお玉が池ゝ偖置て江戸と申す所ろよゝ一日も足を止めし事もなく況て松木とやらんいと家に奉公せしなど或ゝまた名を傳次郎といひしなど毫も覺えゝ御ざりませぬが世よ似た人も多くあればお見違えよてもこれあるやと空嘯て取よ合ねば座不

も今ゝ是までと然いはるれば詮方なしさらば證人を出して見せんと彼方よ向ひ源庵出よと云ば答えて唐紙押じ開け源庵ゝ其所へ立出て一別以來めづらしい傳次郎これでも和主ゝ長崎屋の與市と變名してゐるかと判然いはれて與市の驚き思ひ掛なき源庵が此家よれれば舊悪とこれなる人に話せしならんか心得難しと云ばえよ云で心よ取つ置つ思案よ暮て茫然さり登時源庵與市よ向ひコレ傳次能く聞よ此よお出の先生ゝ汝が毒で殺したる前の先生彦三郎樣の一個息子彦之丞樣と被仰て十三年前米國へ洋行なされ此春やう〳〵歸朝ましよ今宵訪らゞ此家でお目よ掛りしゆゑ汝のなした悪事を一々お話しゆし此おれゝ一度荷擔せしことと先刻許してもらひたるも先生が所持の寫眞挾よ汝の姿があつたゆゑと喜ぶ中よ汝の聲と先生ゝ早くも聞知り吾儕と忍ばせ呼寄しゝ白狀させん計畧なるを何まで強情張てとれば是非なく茲へ証人よ出て汝を責るのだサア眞直よ言てしまへと笠よ掛りし源庵が言葉よいよ〳〵驚く與市豫て松木の息子よゝ洋行中の者ありと聞しが是ある松森か夫とも知ず寫眞を撮せ其上ならず今宵また渠の招ぎようか〳〵と此間へ來りし不覺さよと悔の八千度百千度臍を噛ども詮方なく呆るゝ與市の方よ向ひ松木ゝ言葉を和げて汝の奸悪毋の淫奔今さ

ら云よも及ばねと心よ掛るゝ母が行衛汝の在所よ共よゐるやまた先つ頃箱根にて汝が我よ話したる六年以前班猫の毒よ中りて死せしといふ妻が即ち母なるか包ず語れと問たるよ與市ゝ隠すよよしおければ如何も先年死たる妻と中すゝ即ちお絹なりと答えよりて彦之丞和て知し母の終焉悪きながらも産の恩深き嘆きよ思はもず左右の袂と濡したる後の話説ゝ次回よ説く可し

第十九回　文明の高論仁慈自ら備ふ暗夜の一發悪事自ら訴ふ

彦之丞ゝ再度與市よ向ひ我ゝ本性松木よて日外箱根へ同道せしゝ一橋家の留守居森川左門といふ人なるが斯と明さば汝ゝ町人治療のをりよ遠慮もせんかと思へば云で過しゝより汝ゝ心も附ずして寫させたりし寫眞よ依り今宵の事よ及びしなれば包まず云てしまへよかしと問詰られて余義なくも與市ゝ死せし女房がお絹の由を云たるよ松木ゝ初て母の死を知て嘆よ沈みつゝ源庵もまた初て知る虫班猫の中毒も巡る因果と不覺よも舌と巻てぞ恐れける登時與市の震小僧ゝ脱れぬ所ろと胸と据ゑ松木よ向ひて彦三郎が他よ快樂の出來しと怒りれ絹の心のそれしを考へ能い中とゐり其夜の中ゐ牒し合せて明る朝彦三郎と毒害あし誰も

知じと思ひのほか早晩源庵よ隙見されけん夫より程立ち云出されしが大事を知ば助がたしと水戸様前にて歸途を窺ひ切殺さんと爲たりしが遂くも渠に遊られてゝ最早悪事の露顕と思へばお絹もろとも所有金と衣類器財を引つさらひ江戸と立退上州の深間よ至り名を改め商法せしが運に協ひわづか七年計りの中よ五千圓餘の身代と成しゝ以前彦三郎を殺して松木れ所有金を本錢としたるよ因なりおど夫婦ひとしく思ひ續けて眠れる夢の其中よ亡人の靈現れて罪を責るもしば〳〵なれば彷に魂を慰めんと文久三年の四月十日第七回忌の法事とせし折よお絹ゝ日外も湯元で詳細語りし通り春菊の葉よ就ゐたる虫班猫の毒よ中りあへなく生命を落したればいよ〳〵怨靈の所業と思ひ心よ病で六年間面白からず送りしが計ず貴下よ邂逅世よ怨靈ゝなしといふお説を聞て胸の中の雲霧俄よ晴渡り多年の病苦全快せしが矢張因果ゝ巡り來て人も有らうよ我殺せし松木の子息の貴下よ會ひ治療と受し耳あらず取てもらひし寫眞より仇と知たる天の冥罰今更隠ゝ致さねば親御の敵の此與市以前ゝ肥前長崎の醫師の悴で人殺しの罰さへありて博徒よ入り霞小僧と綽名の兇漢なまじ生中藥の加減を知たが反つて仇となり此大事をば爲しものゝザ〳〵討て亡き親御の修羅の妄執晴した

まへと仔細を演て身動もせざる不敵の魂ひよ源庵ハたゝ舌と卷き不覺よ恐怖する耳なり松木ハ始終默然と聞了つて彼方よ向ひ惡事露顯に惡びれず語り明すハ神妙なり然ども敵を討ことハ天下の禁ずる所よして奈何俱不戴天とハ言ながら汝と殺さゞ我もまた所分を請んハ當然なり然ゞ故由と政府よ訴へ奉んか而して汝を殺せしとて死たる父が蘇生なし喜ぶ譯にも非して反つて母の惡名と世よ廣ふする媒妁なれゞ我ハ夫をも好もしからぬ依てつら〳〵考ふるよ亡父が修羅の妄執と晴して母の惡名も世よ出さざる兩全の計との二個あり夫が一つハ之斯と洋小刀を取出し次の寫眞をグット貫き此方よ向ひ晋の豫讓の例よ倣ひ汝の寫眞を貫きたれゞ我孝道ハ果したり又一つとハ外ならず此度上阪なしたるハ腹異の妹小糸を身受の爲なり抑も此小糸といへる者ハと是より身の上を說こと一遍今身の代ハ五百兩なり我ハ汝と討も甲斐なけれゞ生命ハ助つかはす故汝ハ妹の身受とおし我に渡さゞ亡父へ罰と詫るの便となり仇敵といへど愛子の苦界と扱ゞ草葉の陰よして喜びもすれ怨いあるまじ心得たるやと說示す實よ文明開化の國よ育し人とて益もなき敵討沙汰せざるこそ奥床しくも又優しけれ霞小僧ハ之を聞てたゝ感涙よ咽びしがやう〳〵よして首を上げ世よ有難き今

のお言葉僅の金よて妹御の身受をなせハ吾儕の罪とお許し下さるとハ何とふ禮の言やうさへあき程嬉しく思ふまゝ只今金をお渡しゆしてと言と松木ハ押止め我ハ金にて取んといふ心ハ毫もあらざるうへ今宵も殊よ更たれゞ足下もやすみ明日ハ勤て田上屋へ行き妹の身と購ひ來りて我よ渡しね迚も定めしやすみつふん足下も早く寐たまへと飽まで大器な彦之丞の言葉よ與市ハ一句も出ず翌日と約して向ふ座敷の已が閨房にぞ入よける斯て彦之丞ハ下婢を呼び床を延させ此按摩ハ以前の知已で有たれゞ逗留中の一兩日ハ我身の邊へ置よしを言つゝ共よ床をならべ臥をり枕の側よ置し行燈ふつと吹消たる用心なおざり成ざりける行ひ有とハ知ざれど目前にある仇敵とゞ妹の身受ぐらゐと托し免すといふハ最手ぬるしと源庵心よ思ふものかゝ強て夫とも云かぬれゞ其まゝよして枕よ着げり去程よ長崎屋與市ハ思ひ掛なき彦之丞よ出會しのみかハ源庵を證人として舊惡と訊問されてハ脫るゝ道なく白狀せしが幸ひよ五百兩よて我身の罪を許さるゝ事の悅ばしさよ毒蛇の口と脫れし心地し已が寐間へと立返りしハ亥の刻近き頃なれゞ迚ハ前後も夢知ず打臥たるハ未だしもの事と思ひて襖の中へ入てつら〳〵考ふるよ五百兩にて一時の生命を助らるゝハ能れども生涯渠等二

人よゝ天窓の上る節ゝなく且此悪事が渠等の口より漏あゞ松木は打捨置とも政府よ知れて召捕れなゞ其時悔し〳〵思ふとも甲斐なきなれゞ世よもいふ毒と喰ゝゞ皿の譬今宵ひそかよ渠等二個を殺して後安くせんと大悪心を生じつゝ窃と起出身仕度なし旅中の用意と齎した る六挺がらみの短銃と携へ出しは彦之亟もまた源庵も咽喉へ押當たゞ一打よ殺さんと扳足さ去足椽側を廻りて彼方へ忍び行き坐敷の外より覗へゞ中にゝ燈火もあゝさるあそ天の與と一個點頭禊を明てすゝみ入ど善悪も分ぬ眞の闇かぐゝる足元音させじと思へゞまず〳〵困ぜしかゞ側よ寐たる源庵が掻卷の袖へ足踏入れ嗟嘆と計り度を失ひ足を取れて倒を轉ぶ機曾よ落せし短銃の火蓋ゝ切てドンと一發放したりける物者よ二個ゝ目覺し岸破と跳起なかよも按摩源庵ゝ曲者こゝよと思ふより傳次の足と引捕へモシ先生曲者ゝ捕へましたの大音聲松木ゝ心得搨附木を出しより早く行燈へ灯を點し源庵もろとも彼の曲者を其所へ引据よく〳〵見れゞ思ひ掛なや甲夜のほど説論をなて免去たり去傳次の與市でありたれゞ這は〳〵如何と兩個は面見合去て呆るゝ外あへて言葉も出ざりけり此短銃れ音を聞附け何事やらんと主個を首め與市の連より泊り合せ去客人一同みな此所へ集ひ來りて穿がはりゝ羇

〳〵し々詈り騒去きと松木は手を揚げ之と制し今ゝ與市の爲よとて包もなふねゞ打明てことの素とゞ告ヤさんと我身ハ素生與市がこと恨を呑で諭したる甲夜の始末を逐一よ話しゝりしよ一同が偖ゝ與市といふものゝ然る悪黨よてありたるかと舌と卷てぞあたりけり登時松木ゝ最前より身を恥ぢ首も上得ざる與市の側へ進み寄り彼の短銃を前よ置き奈何なる事を言出るや开ゝ結局の次回よ解かあん

第二十回　短銃の自盡怨と解く傳次の終枝葉の繁茂榮を見る松木の家

復説松木彦之丞ゝ與市の前よ膝を進め言葉静よ言るやう父と毒害されたりける無念ゝ言も魯なれど母の悪事と世の人よ知せじ物と思ふより許し難かる汝の罪も妹を購ひ出しなば許しやらんと言たるよ未だ悔悟の念あゝず忍び來りて飛道具を以て吾儕を殺さんとゝ根を斷ち猶も葉と枯す深き悪事と知れたり今其素と考ふるよ汝に我を生し置ゞ悪事と口外さるゝならんと心よ怖る所ろより此擧動よゝ及びし成べし然ども與市能く考へよ此事口外する程なりせゞ敵と名乗し其方を此方よりして助可きや然るも汝ゝ思ずして殺さんとまでせられてゝ心盡しき水の泡なり畢竟吾儕が生てをれゞ汝ゝ安心あるまゝけれゞ我を討取心安く此

世と過せイザと計り短銃與へて胸押し廣げ茲より撃と差示す實よ潔白なる壯士の一言與市ハ返ず言葉もなく首とうなだれ力たりを力が漸々よ去て彼方よ向ひ恩義よ恩義と累たる貴下を撃て枕と高く眠らんものと思ひしハ惡事よ覆輪掛たる行ひ今更面目次第もなき此身の罪と如何せん今こそ與よ悔悟せし吾儕が何で貴下よ對し此飛道具が向らるべきやヤし譯よハ此通りと言より疾く短銃を取よと見えしが我と我咽喉をドウとうち貫き叫びもあへず煙りれ中よ倒れて息ハ絶にけり此体を見て一同ハ驚くの外言葉もなきよ松木ハ衆庶よ打向ひ與市ハ惡事の悔悟をなし自ら死せし者なるよしハ各自已よ見ふるゝ通り相違なけれバ一同と證人として政府へ訴へ御所置を受んといへるうち夜もハや已よ明たれバ松木ハ書面を認めて土地の法衙へ訴へ出また源庵よハ旅費と與へ汽船よ乘せ東京を過て上州深間へ至らせ管伴なりと同道せよと言付彼方へやりよけり土地司は訴へよ依て死骸と撿死しそれ〴〵の口書よ依て考ふれば松木れ訴へよ露違はず與市れ舊惡判然たれども本人已よ自害し了れバ最早夫よて攝ひなし死體ハ假埋然る可きヤし渡去て引取去よ與市が仲間の證人等ハ初て安堵し已がさま〳〵家路と差て歸りけり松木ハ宿の主個と計り與市の死骸を邊なる寺院へ假

よ埋めつゝ上州よりして源庵の歸り來ると待けるよ日おらず管伴喜兵衛を同道し歸り來れバ松木ハ喜び直よ面會なしたるに喜兵衛ハ源庵より委細を聞き主個の舊惡よ驚きたる趣きと演べ生前のお約束よてしハバと小糸の身の代五百両を出して之を松木よ渡し就て主個が死去の上ハ上州深間の本宅よハ妻子もあるねバ家と繼ぐ者とて今ハ非るうへ素々不義の金と以て爲し家よて有なれバ相續人よあり人も有まじ依て吾儕が思ひまゝるハ彼身代の半の金もて世を去給ひし方々の法事を營み餘りを以て里の貧民に之と施し又半なる其金ハ勤つゝきし奉公人よ與へて暇を取するハ如何な物で御座りませうと殘る所ろなく語ひしよ松木ハ大きゐ之を賞め小糸と身受し實の兄と語るに小糸の喜びはたとふる物もあらざりけり斯て松木ハ小糸ならびよ源庵とも引連喜兵衛と同道し上州へ行き里正よ會て法事の事を述るよ松木の始末ハ此土地へも早くも聞ゐたりければ正ハ奇特の事とし稱へ承知したれバ家財所有金を調て見るに二千兩餘有去よ依つて五百両を奉公人一同よ分ち與へ五百両をバ祠堂金として香華院へ納め入れまた五百両は其土地の貧民等よ分ちて取せ殘りの五百兩をもて彦三郎、れ絹、與市、金六等の菩提のため大法要といとなみける喜兵衛ハ分ち貰ひし金よて田地

を求め百姓と成て生涯樂に送り松木は江戸へ立歸り森川左門が許へ到り此頃末を話せしよ左門は始終聞こと〳〵よ且驚き且感じ彦三郎の横死と悲み此むね君公よゆし上しよ殿ハ松木が穩便の計ひ方と好し給ひ實よ得難き者なれバと奥よ勤し女中頭清川となん言る婦人は幼稚時よ父母よ別れ御臺所の御手元よて育し利發の美人よして年ごろもまた彦之丞と似附はしくも有なれバ妻よ娶りて然るべしと仰ありしよ森川は恐み受て月下氷人あし彦之丞よ嫁合せしよ松木は君恩身よ餘り精勤致す耳ならず萬部が一の報恩よもと妹お糸を御臺所の御手許へ上げ御奉公を勤させしよ御意よ協ひ十八のとりまで勤をりしが此節森川の息子佐太郎ハ二十歳よ成しかバ御臺所の仰を以て松木の妹お糸を娶り夫婦中よく暮ーヽよ彦之丞清川れ中よも男女あまたの子と設けまた佐太郎れ糸の中よも小兒多く設けしかバれ糸ハ次男と以て厚倉家を立させ松木森川の両家ハいよ〳〵榮ゆく餘光に連源庵ハ寫眞の道と勉強せしかバ月と累て上達したれど一度惡事よ與したる其罪惡ハ悔悟なすも滅せぬものゆや幾程もなく病よ罹て死たりとぞ聞るがまよ〳〵勸懲の端ともなれと筆記したれど文意のいと〳〵拙なきハ許させ給へと單ゐ願ふ

開明奇談寫眞廼仇討終

明治十九年八月三十一日 日翻刻御届
同 年十月 出版

定價八十錢

編輯人 伊藤專三

翻刻出版人 京橋區鎗屋町十四番地 野村銀次郎

發兌人 同區同町同番地 閻花堂

大賣捌所
日本橋區横山町三丁目 辻岡文助
同區同町三丁目 鶴聲社
京橋區南鍋町 兎屋誠
同區尾張町 上田榮次郎
日本橋區馬喰町二丁目 山口屋藤兵衛
同通り三丁目 丸屋鐵次郎
京橋區南傳馬町 春陽堂
日本橋區藥研堀町 鈴木喜左衛門

○忠義水滸傳　上下二冊定價金八圓
○曲亭馬琴著朝夷巡島記　全一冊同金三圓
○扶桑皇統記　全一冊同金三圓
○前太平記　全一冊同一圓五十錢
○金紋箱崎文庫　全一冊同二圓五十錢
○朝鮮軍記　全一冊金二圓
○大久保武藏鐙彥左衛門宇都宮松前屋
○天草軍記　全一冊同一圓五十錢
○鍛鐵ハ主人　全二冊定價金一圓
○佐賀怪猫傳　全一冊同八十錢
○北雪金澤實記　全一冊同八十錢
○美談
○加藤清正一代記　全一冊金一圓
○佐倉宗吾義民傳　全一冊同七十五錢
○菅原天神記　全一冊同金五十錢
○千代田城　全一冊同四十五錢
○怪譚皿屋敷　全一冊同八十五錢
○雲夏草紙　全一冊同八十五錢
○常妙尼夜月　全一冊同八十錢
○將門山
○一休禪師御一代記　全一冊同八十錢
○三國七高僧傳　全一冊同一圓五十錢
○中將姫一代記　全一冊同五十錢
○吉備大臣　全一冊同六十錢
○名畫血達摩　全一冊同四十錢
○櫻田血染雪　全一冊同四十錢
○水戸黃門記　全一冊同八十錢
○道成寺鈴魔記　全一冊同八十錢
○重扇五十三次怪猫　全一冊同四十錢
○小野小町業平草紙　全一冊同七十錢
○田宮坊太郎孝勇傳　全一冊同一圓
○松前屋五郎衛　全一冊同六十錢
○親鸞上人一代記　全一冊同一圓
○大久保彥左衛門一代記　全二冊同九十錢
○宇都宮騷動之記　全一冊同九十錢
○櫻田血染雪合本　全一冊同一圓十錢
○筑波水滸傳
○大阪雲切仁左衛門　全一冊同四十錢
○仁政錄
○絵本太閤記山崎大合戰　全一冊同四十錢
○同太閤記大德寺燒香場　全一冊同六十錢
○同賤ヶ嶽七本鎗　全一冊同六十錢
○同木下竹中問答　全一冊同四十錢
○鬼神お松　全一冊同四十錢
○正札附辨天小僧　全一冊同卅五錢
○新体詩歌　全一冊全二十五錢
○暦代忠孝鏡　全一冊同十五錢
○筆鄙　全一冊同二十錢
○夕霧伊左衛門　全一冊同四十錢
○嵐山花風郎
○黑船風雅吉
○唐土摸樣倭粹子　一冊同八十錢
○佐原喜三郎
○大坂屋花鳥
○島千鳥沖白浪　全一冊同八十錢

特8
133

097923−000−0

特8−133

開明奇談写真廼仇討

五明楼　玉輔／口演

M19
DBT−0095